旨を公能に諭し、之れを宮に入る、群臣之れを不可となす、後白河法皇またしば〳〵之れを言ふ、天皇聽かずして曰く、天子に父母なし、何ぞ朕が意に任せざると、永暦元年、宮に入る、時人之れを二代后と稱す、建仁元年十二月崩ず、壽六十二。

藤原光長

隆親の男にして土佐氏の第四世、書所預となり、從四位下に叙せられ、越前權守に任ぜらる、後刑部大輔に任ず、少時より父隆親に從ひて書法を學び、巧に佛像を畫く、然れども之れに安んぜず、ます〳〵斯道を研究し、遂に妙手と稱せらるゝに至る、常に勅を奉じて畫く、畫く所のもの佛刹靈驗の圖奇事の草子等なり、其の贊辭の上にあるものは、重に當時の公卿縉紳の手に成らざるはなし、一年々中行事の圖、六十卷を畫きしが、之れを以て其の名聲四方に轟く、其の畫くところのもの、人物花鳥草木屋臺等、大に風致の愛すべきものあり、其の粗密濃淡等、法に外れ、而して法に合ひ、其の自由自在なること驚嘆の外なし、世に慶恩、吉光、行光、行秀及び光長を稱して和畫の五筆といひ、また光起光信及光長の三子を稱して土佐の三筆といふ、而して光長此の二のものに漏れず、其の巧妙なること知るべきなり、文治年中の人にして京師に歿す、遺跡にして著明なるものは、伴大納言草子、三十六歌仙殘缺、保元合戰屏風、兒文珠、彦火々出見草子、病草子、京大報恩寺驛迦堂はめの畫、餓飢草子、吉備入唐草子、雜畫、慈鎮和尚法華經の口畫、聖德太子妹子馬子の圖、太子堂繪張付及び信貴山緣記とす、而して此の緣起、世に鳥羽僧正の揮毫に係れりと傳ふれども、是は誤りなりと云ふ。

藤原光秀

吉光の男、從正位下飛驒守たり、畫に工なり、其の歿年事歷等詳ならず。

藤原光正

左近將監に任ず、光長の子なりと傳ふ、圖畫を善くす、

藤原光行

畫家なり、畫所となる、光源院義輝の元服するに當りてや、光行其の櫛及び手巾に畫きしと云ふ

藤原行房

從二位經尹の子なり、家を一條と號す、其の先行成以來世々書を以て顯はる、行房亦之れを巧にす、笠置の陷るや、行房脫し去り、後醍醐天皇の隱岐に幸するに從ふ、供奉甚だ謹む、天皇深く之れを眷愛せりまた〳〵光嚴院の位に即かるゝや、悠基主基の歌を屏風に書くものを撰ぶ、京師其の人なし、是に於いて議して行房を召還せんと欲す、天皇之れを聽いて悵然たり、明

年車駕、京に歸る、行房之れに扈從す、延元年中、義貞と、もに金が崎に據る、城陷りて之れに戰死す。

藤原歡子　歡子は關白敎通の第三女、後冷泉天皇の后なり、姿色豊艶、琵琶を善くし、又書圖に工なり、永久二年入内し、三年女御となる、五年賴通の女、新に宮に入る、次で皇后となる、歡子恚りて宮を出で、兄僧靜圓、小野の山房にあり、即ち往いて此に住す、世に小野皇太后と稱す、康和四年八月崩す、年八十二。

藤森弘菴　名は大雅、字は淳風、通稱泰助、弘菴は其の號、また天山の別號あり、江戸の人にして有名の儒者なり、書を能くせり、少うして學を好み、常に志想を綠磨し、天下の憂を忘れず、弱冠にして父の後を受け、以て祐筆となる、初め柴野碧海、古賀穀堂、古賀侗菴、長野豊山等に從ひて學び、最も詩を能くし、筆札に巧なり文久二年十月歿す、年六十四、江戸麻布曹溪寺に葬る、

原井竹外　名は啓、字は士開、竹外は其の號なり、また香雨仙史の別號なり、攝津の詩人なり、はじめ賴山陽に從ひて學び、森田節齋と親しみ善し、家世々高槻藩の右族なり、竹外詩人を以て自から居り、老儒碩學も亦之をに推服し、稱して絶句竹外と號す、芳野懷古の一絶實に千古の絶唱とす、また書を善くせり。

船山耕山　江戸の書家なり、名は雅、通稱幸四郎、松平周防守の臣なり、寶曆十二年十月三日歿す、船山一に船田に作れるあり、未だ其の眞否を詳にせず。

不味　畫僧なり、妙心寺の住僧にして名は雲居慈光と號す、玉潤の風を學び、墨色の山水を畫くに巧なり、一時世に鳴れり。

文康　浮世繪師なり、安五郎と稱す、文調の門人なり、文化中の人。

文慶　本院敦忠の孫、佐理の二男、一には敦忠の孫、相信の二男なりと云ふ、畫僧なり、比叡山に登り天台の學匠となり、後法印大和尙に進み、大雲寺の別當に住し、後に岩倉提房法印と號す、永承元年六月三日寂す、年八十、能く祖師人物を畫く、殆んど活動するが如し。

豊後法橋　氏名を詳にせず、巨勢派の畫人なり、阿闍梨覺玄に學びて畫を善くす、八坂法觀寺の緣起を畫けり、康安年中の人なり。

文如　西本願寺の法主なり、竹隱紹智に學びて藪内流の茶道を善くす、傍ら畫に工なり。

不破素堂　通稱半治郎、天保四年四月を以て江戸に生る、狩野壽信に從ひて畫を學ぶ、人物花鳥を善くす。

不破素樂　通稱福太郎、明治元年正月生る、素堂の子なり、父に學びて畫を能くす、山水花島に巧なり。

淵邊游萍　森南湖の門人にして南宋派の畫家たり、初め東京府に奉職せしが、後辭職して專ら畫を敎授す、文化十四年七月の出生たり。

武原本全　竹陰また夢塘と號す、近江の人なり、天保十三年十二月生る、安田老山の門に入つて畫を學ぶ、山水を善くす。

古川秋達　通稱韶一郎、嘉永四年二月生る、安田老山に從ひて畫を學ぶ、山水に巧なり。

藤田六石　名は良緒、半紅と號す、嘉永六年十月生る、中西南喬に後ひて畫を學ぶ、山水に巧みなり。

福田永齋　通稱半三郎、天保五年四月生る、佐竹永海の門人にして畫家なり、山水を能くす。

古川鐵耕　名は東陸、清人馮鏡如に就ひて畫を學ぶ蘭石は其の殊に巧なるものなり。

古屋古玩　名は重壽、文政十二年八月生る、初め荒井尙春に從ひて畫を學び、後長谷川雪堤の門に入る、人物は其の最も善くする所なり。

降幡周里　名は敬次、豐原國周の門人にして人物畫に妙を得たり。

◎こ之部

興義　近江三井寺の住僧にして、頗る畫名あり其の門生成光鷄を閑院の障子に畫く、生鷄來りて之れを蹴りしと云ふ。

勾當內侍　世に勾等內侍の畫と稱するものあり、然れども勾當內侍は官名にして且つ之れに任ぜられたるもの、また少なからず、故に其の何人の手に成りしや、得て考ふべからず、而して後土御門天皇の內侍に始まりて後柏原天皇の內侍に至る、各々土佐の畫風にして、其の筆法を以て之れを鑑別しがたしと雖も、每畫必ず贊辭を加ふ、文字に鑑定之れなるに依りて、また畫も其の人を定むること難からず、其の遺跡を見るに能畫といふにはあらず、多くは粗畫にして雅趣あるを愛玩すべしと云ふ

興　儔　字は心越、一に東皐と號す、常陸の國祇園寺の住僧にして明人の歸化せしなり、書畫琴及び篆刻を善くす、水戸光圀の恩遇を被むれり。

公辨法親王　後西院天皇の第十六皇子、寛文九年八月二十一日生る、母は天條局入道前權大納言定矩の養女延寶二年五月毘沙門堂に入り、公海の附弟となる、元祿三年、台命に依り輪王寺門跡となる、爰に第三世なり、正德六年四月十七日寂す、年四十八、親王嘗て狩野常信を召して畫を學ぶ、筆力柔順、逸品少なからず。

小浦松園　畫家なり、臼井廣士の門人にして能登の人なり。

紅蘭女　詩家の泰斗梁川星巖の妻なり、畫法を竹洞に學び、山水花卉を善くす、また詩に長ず、實に近世の女傑なり、明治十二年三月歿す、年七十六。

五岳　前篇載する所の福原五岳とは別人なり、眞宗の僧、姓は平野、名は聞慧、古竹と號す、豊後國日田願正寺に住せり、廣濶淡窓に就いて學び、詩書畫三絶の稱あり、其の畫風韵多し、寸縑尺素といへども、人爭ひて之れを珍重す、明治二十六年三月三日寂す、年八十三。

古賀精里　名は樸、字は淳風、通稱彌助、精里は其の號なり、家世々佐賀藩に仕ふ、精里少うして學を好み日夕勉勵怠らず、長じて王陽明の學を好み、後京師に遊ぶ、此の後西依成齋の門に入り、最後に大阪に至り寓し賴春水、尾藤二洲等と親しみ交はる、是に於いてか、終に舊學を捨てゝ專ら朱氏學を慕ふ、後國に歸り、藩に用ゐられ、機務に參し、聲名大に揚る、時に國用給せず、財政大に苦しむ、精里建議して之れが匡濟策を立つ、侯之れを用ゐて整理し、國用大に給ず、寛政三年、侯に從ひて江戸に出でしが、幕風夙に其の聲名を聞き、命じて經を昌平黌に講せしむ、藩臣にして此の黌に入り、以て經を講するは此の人より始まる、人大に之れを榮とす、同七年擢んでられて幕府の儒臣となる、是に於いて尾藤二洲、林祭酒、柴野栗山等の老儒と丶もに戮力して學政を振興し、文化八年、林祭酒と丶もに對馬に至り、韓使に接す、韓使大に其の學德に服す、又書法を好む、夙に松雪を學ぶ、後南宮玄宰の諸家を參用し、以て晉唐に溯る、雅健老蒼、一時に冠たり、又槍術射御を善くせり、文化十四年五月四日歿す、年六十八。

虎溪　名は永義、もと長州毛利氏の族たり、後出家して晉く天下を周遊て、以て諸老に參す、寛文中、伊達綱村之れを聘して仙臺東昌寺の住職となす、禮遇大に厚し、元祿中移つて東福寺に住す、綱村之れに贈るに

金襴法衣と黄金とを以てす、世に之れを呼んで千金法衣といふ、後復た東昌寺に歸住す、虎溪、綱村に請ひ、別に一寺を創し、僧鐵牛をして開山たらしむ、虎溪學識深遠、且つ書を善くす、享保八年九月十八日、東昌寺の禪室に入りて叔す、年八十。

湖　玄　岱　松江と號す、信濃松本藩の儒臣なり、少うして桂山彩巖に學びて詩文を能くし、兼ねて書を工にす。

悟　心　名は元明、悟心は元の字なり、懶菴また道遙と號す、伊勢正端寺の住僧なり、京師洛東一両菴に住す、書を巧にし、また詩文に妙なり。

臣勢利和　椿園と號す、從五位下日向守たり、千蔭を慕ひて大に其の風を得、また其の書風を學びて巧なり其の相比ぶるや、判別しがたき程なりと云ふ。

小永井小舟　名は岳、字は君山、通稱八郎、家世々佐倉の藩老たり、小舟少うして江戸に出で、野田笛浦、古賀謹堂に就き、以て研究怠らず、後また羽倉簡堂の門に入る、本姓平野氏、安政五年、小永井藤左衛門の嗣となる、明年軍艦操練所の屬史となる、萬延元年、修信使に從い、米國に航し、歸朝の後調役に進み、大坂に遷任す

維新の後、一橋侯の侍讀となり、次で尾張侯の聘に應じ國校の教頭となる、晩年東京に移り、淺草新堀に住み、門弟を集めて教授す、其の名遠近に鳴る、又書を巧にし殊に行書を善くす、明治二十一年十二月十日歿す、年六十、著書若干あり。

近衛家熙　太政大臣關白基熙の子、官左大臣攝政關白に至り、太政大臣に進む、享保十年、詔して三宮に准ず、元文元年十月薨ず、年七十、嘗て書を好みて巧なり明人の風を慕ひて墨竹を畫くに妙を得たり、其の他茶道及び典故に精通せりと云ふ。

近衛尚道　後法興院關白政家の子なり、明應二年三月二十八日、關白となる、時に右大臣正二位たり、年二十二、同四年從一位に進み、五年左大臣に陞り、同六年六月關白を辭せり、後太政大臣となり、三宮に准せらる天文十三年八月薨ず、年七十三、書を善くす、其の風格飛鳥井家より出で、而して別に一家を成す、古近衛流と稱す、また和歌に巧なり。

小山正太郎　現今洋畫界の巨擘と稱せらる、門下より多く俊才を出せり。

小林吳嶠　東京の畫家、明治四年八月京都に生る、

今尾景年に就て學ぶ、美學、考古學及び化學をも研究せり。

小堀鞆音　通稱桂三郎、蛇の舍と號す、須藤晏齋の三男、元治元年二月下野國安蘇郡小中村に生る、明治十五年上京し川崎千虎に就て有職故實を研究し大に大和風の繪を能くす、曾て美術學校の教授となりしが辭して育英に力む。

近衛篤麿　霞山と號す、關白忠熙の第九子、文久三年六月京都に生る、夙に和漢學を修め、歐洲各國に遊學すること數年、後貴族院議長に擧げられ亦學習院長に任せらる、文書を能くす。

小室重弘　屈山と號す、宇都宮藩士、安政五年江戸に生る、民權自由の說を唱へ自由黨に入り後政友會員として大に國事に尽す所あり、詩文を善くす。

國分青厓　名は高胤、字は子美、太白山人と號す、夙に漢學に通じ殊に韻語に巧なり、征清役山縣大將に隨つて從軍せり、曾て日本新聞社に在つて評林體の一派を創む。

小林永興　小林永濯に就て學び遂に其衣鉢を受く、永濯養つて子となし家を嗣がしむ。

後藤芳景　通稱德太郎、豐齋の別號あり、大阪の人中井芳瀧の門に入つて浮世繪を學ぶ、後諸名家に就て畫法を質し業大に進めりと云ふ。

後花園天皇　御畫世に傳はる、文明二年十二月二十七日崩ず、壽五十有二。

五條御　山蔭中納言の女なり、一日自から己が身より火焰を發するの圖を畫きしに、其の煙散亂す、和歌を其の上に題し、以て己が眷戀する所の男子に贈る、と云々、大和物語に見ゆ。

後高倉院　高倉天皇の皇子、守貞親王なり、後堀河院の御父に渡らせらる、故に太上天皇と稱す、天性繪畫を好み、曾て狹衣物語の故實を畫かれたり。

越田安方　南都藥師寺に藏する所の佛足石あり、蓋し王玄策の圖を摹する石なり、是れ安方の畫きし所にして、事は天平勝寶四年の秋なり。

少堀政貴　遠江守政一の三男にして十左衛門と稱す茶道に精しく、書法に巧なり、其の名聲高し、寶永元年六月二十三日歿す、年六十六。

小堀政尹　通稱權十郎、蓬雪と號す、政一の二男、德川幕府の旗下にして千石を領す、茶法及び書法を父に

受けて之れを善くし、其の名聲籍甚たり、又傍ら畫を嗜み、山水花鳥人物に巧なり、又好みて設色を事となす、毎に半井卜養と交る、卜養は幕府の醫官にして狂歌を善くす、依て狂歌の賛あり、元錄七年八月四日歿す、年七十。

小松原翠溪　名は貞、字は廓大、貞四郎と稱す、江戸の畫家なり、天保五年十二月晦日歿す、年五十四。

小松原翠湖　名は誠義、字は行源、希唐菴と號す、翠溪の男にして江戸の畫家なり。

狛堅部子麻呂　畫工なり、孝德天皇より齊明天皇の頃の人なり、元高麗の人、高麗繪師と稱す、蓋し高麗繪師の姓を賜ひしならんか、孝德帝の命を受けて多く佛像を畫き、之れを川原寺に安置す。

高麗師麻呂　高麗の畫師なり、來朝して齊明天皇に仕ふ。

高麗繪師麻呂　齊明天皇の七年、高麗の人、羆皮一枚を持して、其の價四綿六十斤と稱す、市の司之れを見、咲ふて去る、高麗繪師麻呂同姓の賓を私邸に延く、此の日繪師、官の羆皮七十枚を倩りて賓席となす、客羞怪して避く、而して繪師麻呂は畫家なり。

五味　畫家なり、石川丈山の覆醬續集を見るに五味氏の畫く所の菊蝶の圖に題するの詩あり。

金剛佛子印玄　畫家なり、平生好みて佛像を畫きし、而して其の圖數卷東寺の寶輪院に在りと云ふ。

近藤清春　助五郎と稱す、江戸の浮世繪師なり、烏居清信の門人にして當時風俗の人物美人遊女等の畫に巧なり、又草雙紙の版下を畫く、又傍ら戲著をなし、自から畫き、自から畫き、而して自から之れを開板し、以て大に弘めり、又はじめて泥畫を畫けり、正德享保の頃の人にして其の生死年月等詳ならず。

五姓田義松　照海と號す、義松は通稱なり、初世芳柳の男、安政二年四月江戸に生る、幼より英人フクマンに就て洋畫を修ひ、明治十一年宮內省の命により先帝の御影を奉寫す、此年北海道御巡幸の供奉を命せられ沿道の勝景を寫して日々天覽に供ふ、十二年皇后陛下の御影を奉寫す、十三年佛國に航しボナ、の門に遊び研鑽八年、去つて歐米を歷遊し前後十年を經て歸朝しナイヤガラ大瀑の圖を奉獻す。

巨勢小石　名は金起、金岡三十七世の嫡流金親の男なり、天保十四年九月京都に生る、夙に家庭に學び佛畫

は特に祖父金彦に法を授かる、年十三、岸連山に就て學び後中西耕石に南畫を修む、明治十一年清國に遊ぶ、東京及京都にて畫學校に教鞭を採るを數回なりと云ふ。

小杉榲邨　杉園と號す、德島藩士、天保九年九月生る、國學に長ず、諸官に歷任し美術學校教授となる和歌を善くす。

葫蘆子　雪舟に就つて畫を學び、墨畫の鷹に妙を得たり。

五井蘭洲　名は純貞、字は子祥、蘭洲は其の號なり又洲菴と號せり、通稱藤九郎、二軒の男なり、はじめ家庭に學び、得る所少なからず、名聲稍揚る、享和年中、中井甃菴懷德書院を攝津尼か崎に設く、三宅碩菴其の講席に至たり、蘭洲乃ち其の助教とりて教授に從事す、幾ばくもなくして江戸に出で、津輕侯の招聘に應ず、當時津輕は僻陬の地、文學の何物たることを知らず、民俗甚だ野卑、蘭洲之れを化し以て學に赴かしむ、元文四年、辭して大坂に歸れり、遠近爭ひて召すといへども更に應せず、懷德書書院に在つて教授す、寶曆十二年三月十七日歿す、年六十六、著書若干あり、また畫を善くせり。

小林樫湖　名は監峻、嘉永二年六月生る、松本楓湖の門に入つて畫を學ぶ、人物を能くす。

五姓田芳柳　文政十年二月生る、初め樋口探月の門に入つて學ぶ、後一派を成す、人物畫に巧なり、明治五年今上陛下の御肖像を畫くの命を拜せり、芳柳畢世の名譽之れに過ぎずとなし、齋戒沐浴、以て之れを畫けりと云ふ。

小林清親　方圓舍と號す、人物景色を畫く、亦滑稽畫に巧なり、清親のポンチ畫とて世に名高し。

小塚南坡　名は直彦、天保五年二月生る、富田南山の門に入つて畫を學ぶ、圓山派の畫家にして人物に巧なり。

兒玉果亭　南宋派の畫家なり、田能村小虎の門に入つて畫を學ぶ、花卉山水に巧なり。

兒玉蘆香　通稱源平、帆足杏雨の門人にして南宋派の畫家なり、山水を能くす。

小林晴景　通稱述作、安政五年生る、南宋派の畫家なり、目賀田芥菴の門に入つて學ぶ、人物は其の最も得意とするところなり。

小林朴亭　名は良重、天保十年三月生る、岡本秋暉に從ひて畫を學ぶ、業成りて後、伊豫西條藩の畫師となな

る、沈銓流にして花鳥を能くす。

近藤墨癡　名は敦吉、南宋派の畫家なり。

小西海雲　南宋派の畫家なり。

後藤松湖　名は麓、南宋派の畫家なり。

小池鱗齋　名は義信、定次郎と稱す、鱗齋は其の號なり、一に又雲處と號す、嘉永五年二月生る、狩野久信の門人にして畫家なり、人物を善くす。

小林南岬　通稱粲次郎、春木南溟の孫、南華の子なり、安政六年正月生る、狩野永濯の門人なり、人物及び花草は其の最も能くする所なりと云ふ。

小林椿岳　通稱城之、文政五年七月生る、大西椿年の門に入つて畫を學ぶ、人物花鳥に巧なり。

小西南岳　通稱平三、名は良行、字は士明、南岳は其の號、一に又竹堂と號す、大阪の人なり、畫を父南齡に學んで之れを能くせり、明治元年歿す。

小林卓齋　京都の畫家なり、通稱卓藏、別に大觀と號す、天保二年五月生る、舊瀧口宮人小林左兵衛少尉の二男、學を好み書法を貫名海屋に就て授かる。

小室翠雲　東京の畫家なり、通稱貞次郎、又靜觀窟と號す上州館林の豪商某の男、明治三年八月生る、夙に畫に好み田崎草雲に就て學ぶ。

兒島基隆　森高雅及び浮田一蕙等に就いて畫を學び人物花鳥を善くす、土佐派の畫家たり。

●ゑ（え）之部

永意　永意は畫家なり、狩野岡の子にして、其の筆力父に比して分毫の優劣なし。

江間東邱　名は方壽、字は子靜、通稱德中、仙子樓と號す、畫家なり、安政三年十月十一日歿す。

延長公主　延長第四公主柔德早く樹ち、淑姿花の如し、公主時々幽閑を慰するものは、書畫の戲れのみ、是に於いて點蠅を成すの妙に因て殆んど屏風に上す、筆戀を廻らすの能を以て、亦乘露に巧なり、即ち公主翰墨丹青を兼ねて之れを能くするものなり、其の事源順和名抄に載せたり。

江村北海　名は綏、字は君錫、通稱傳右衛門、北海は其の號、伊藤龍洲の二子なり、母は赤石の游士河村氏のな女り、故に北海出でゝ九歳の時より十八歳に至るまで、舅氏の許にあり、未だ曾て學に就かず、好んで俳諧を爲す、一日梁田蛻巖、北海に語つて曰く、子の才氣を

以て、若し十七字の俚歌を棄てゝ學に就かば、其の快果して如何と、北海是れより大に學に志し、晝夜刻苦精勵遂に有名の詩人となる、また書を善くす、後宮津侯の文學、江村毅堂の後を繼いで其の姓を冒せり、天明八年二月二日歿す、年七十六。

繪馬額屋輔　本性は松下氏、江戸赤坂一ッ木町、泉屋覺之丞の長子にして狂歌師なり、幼名を虎之助といふ、後賀久輔と通稱せり、初代北斗菴の兄たり、幼少の頃より文事を好み、嵩谷の門に入りて畫を學び、號を嵩壽と稱す、稍工みなるに至りて、英一蝶の畫風を慕ひ、遂に其の門人となりて英一翠と號す、また乘樂菅江に就いて狂歌を學び、初め時雨菴繪師空言と云ふ、後故ありて御厩前書替役奥田氏の株を贖ひ、移りて淺草新堀に住す、故に繪馬屋額輔と稱せり、北斗側の棟梁たり、且つ自から畫き、自から賛するを以て、別號を畫賛人とも云へり、老後六樹園の門に入り、其の名聲ます〳〵鳴る、毎年二月初午祭に、自畫賛の燈籠を住地の稲荷社に獻ずるを常とす、嘉永七年、病床に臥し奉燈の畫賛を詠ずるに當り、

『すてらるゝ古き繪馬屋の額輔も最早今年がおはり初午』

と口吟みゐ、同年正月二十七日歿す、年七十四、芝二本榎證誠寺に葬る。

圓常　通稱和田源七、書家なり、寛車反蛇足の別號あり、大師風の書を善くす。

圓通　紀伊の人、高僧にして和歌山光明寺の開祖たり、黄檗山に上り、獨湛禪師に就いて學び、學德共に高し、人と爲り清廉無欲、大に觀音を信せり、因て自から圓通と稱す、法眼和尚と親しみ善し、草書に巧なり

遠藤曰人　名は定矩、字は文規、清右衛門また伊豆之介と稱す、仙臺の俳人なり、伊達氏に仕へて大番頭たり、頗る多能の士なり、はじめ志村五城に從ひて經史を學び、また鈴鹿流の長刀を善くす、近世俳諧の大家とす其の句奇警にして餘意あり、是れ蓋し學識造詣の深きに依れるなり、其の門人千を以て數ふ、また兼ねて畫を善くし、筆法淡雅、遒氣紙上に溢る、甚だ謝蕪村の風に似たり、世之れを珍とす、天保七年四月三十日歿す、年七十九、竹林舍、不間菴、柚菴、富山翁等の別號あり。

榎本峨翠　惟將と稱す、峨翠は其の號なり、一に緬葉齋と號す、天保六年正月生る、梅澤晴峨に就いて畫を學ぶ、山水に巧みなり。

江川成之　伊勢の書家なり、近情居士と號す、別に

春雲、月心、両日庵、夜春房等の號あり、約行の二男、嘉永五年二月生る夙に學を修め書を三井半痴に學び空海を慕ひ海屋を參酌して一風を爲す。

榎本東順　江戸の人なり、醫を以て業とせり、本多上野侯に仕ふ、俳諧を由良正春に學びて赤子と號す、彼の其角が父なり、文祿六年歿す。

遠藤貫周　江戸の人なり、文政十二年十二月を以て生る、性畵を好み、住吉内記弘貫に就いて畵を學ぶ、人物に最も巧なりき、安政年間、畵を以て酒井君狹守に仕へたり、明治維新の後、博物局に出仕せり、第一回繪畵共進會に於いて出品の畵を賞せられ、銅印を賜はる。

遠藤廣宗　伴治と稱す、文政七年十一月生る、畵を住吉廣定の門に學び、人物を善くす。

江並槐　名は辰俊、槐は字にして三通堂と號す、文久三年二月生る、狩野派の畵家にして人物を善くす。

江藤六宗　南宋派の畵家にして山水人物を善くす。

江島醉石　天保五年三月生る、狩野派の畵家なり、人物は其の長ずる所なり。

江草鳥醉　土佐派の畵家なり、文政三年五月生る、人物花鳥を畵くに巧なり。

榎本武揚　通稱釜次郎、梁川と號す、幕臣にして天保七年八月生る、始め昌平黌に入り尋て長崎に到り蒸氣機關學を修ひ、夫より和蘭に就し留學六年、大に海軍及法律化學を極め歸朝後、軍艦奉行に任じ和泉守に叙せらる、明治二年軍艦數隻を率ひて品海を脱し大鳥圭介等と函館五陵廓に據り德川氏の回復を圖り大に官軍を惱ませしが後降服して江戸に送らる、明治五年罪を赦され尋て海軍中將に任じ諸官累任各省の大臣となる、辭職後特に大臣待遇せらる、詩書に巧なり。

◉て之部

貞柳　氏は榎並、また曰ふ永田と、通稱善八、或ひは忠兵衛と云ふ、油煙齋と號す、はじめ良因といひしが、後貞柳と改めたり、また清雲洞、圓果亭、珍菓亭助榮亭、長生亭等の別號あり、大阪の人、御堂前に住し菓子を賣るを以て業とす、其の名を鯛屋山城樣と云ふ、父を大和樣といひ、號を貞因と稱し、俳諧を善くす、是に於いて貞柳家庭に學びて俳諧を善くし、又八幡山の豐瀧坊信海を師として狂歌を學び、傍ら書法を講ず、名を信乘と號せり、また一に二世信海とも號せり、松井和泉

なるものあり、嘗て朝廷へ墨を上つる、貞柳之れを見て一首を詠ず、曰く、『月ならで雲の上まですみのぼる、是はいかなるゆゑんなるらん』と此の狂歌、九重の奥に達し、油煙齋（一に由縁作に號る）の號を賜はれり、享保二十年八月十五日歿す、年八十一、狂歌は、嘗て貞德、永得、卜養等盛に唱道すといへども、未だ廣く世に行はれず、貞柳に至つて實に大成せるものと謂ふ。

貞柳（三世）　初め貞佐と稱す、安藝の國廣嶋の人なり、はじめ丸山氏後芥川氏を繼ぐ、二世貞柳の門人にして狂歌師なり、また書を能くし、且つ畫く所あり、師の跡を嗣ぎて三世貞柳と稱す、安永八年歿す、年八十一。

晁有輝　淺岡氏、名は豐興、字は詩叔、江戸の畫家なり、文化八年七月四日歿す。

趙陶齋　名は發、字は仲顒、陶齋は其の號なり、また息心齋、息心居士、枸杞園、清暉閣等の別號あり、長崎の人にして畫家なり、傳へ云ふ、清人趙氏の裔に出づと、幼時父母を喪ひて寄る所なく、大に落魂し、諸所に流寓して日月を送りしが、適々笠禪々師の歸化するあり、乃ち之れに依りて其の弟子となる、笠禪また其の孤なるを哀れみ、慈敎を加へて之れを訓誨す、陶齋釋服を服すること二十餘年、後また俗服に還る、嘗て深見玄岳の家に在り、故を以て深見を氏とせしことありと云ふ、性遊歷を好み、常に天下を周遊し、其の足跡の至らざる處殆んど稀なり、書法を善くす、はじめ江戸に住し、中ごろ大阪に移り、最後に堺に住す、いづれも皆臨池の業を授けり、且つ來り學ぶもの常に多し、森田士德、嘗て陶齋の書を見、之れを評して曰く、趙承旨、祝允明と鏕を並てて馳すべきなり、文徵明、董其昌の如きは、其の後に瞠若たるべきなりと、以て其の書に巧妙なるを知るに足るべし、人と爲り溫雅、然れども氣宇傲儿、頗る酒を好みて不羈、敢て人に屈せざりしと云ふ、天明六年四月二十日歿す、年七十四。

田鳴門　名は章、字は子明、近江の人なり、大阪に移る、其の家は鳴門橋の畔にあり、故に此の號あり、釜鍋を治するを以て業とす、學頗る該博、詩文一種の氣骨あり、日に一小室にありて、圖書を左右にす、人と爲り磊落にして長者の風あり、書に工みなり。

寺澤友齋　名は政長、通稱友太夫、友齋は其の號なり、江戸の畫家にして寺澤流を創めり、元文六年正月二十四日歿す、年七十一。

寺島愛山　名は泰弘、弘化四年二月生る、福田半香の門人にして南宋派の畫家なり、竹を畫くに妙なり。

寺崎廣業　字は德卿、宗山と號す、秋田藩老廣知の男、慶應二年二月生る、始め小室秀俊の門に狩野派の畫を學び、上京後平福穗庵、菅原白龍等に就て畫法を質し我古代大家及宋元明時代名家の畫法を參酌して一家を成せり。

◉あ之部

赤川楓溪　名は俊章（一に年章に作る）字は涼々、熊太郎と稱す、楓溪は其の號なり、播州安志藩の人にして江戸に住す、元祿中の畫家なり。

赤井明啓　文次郎と稱す、明得水と號し、加賀の人なり、書法を佐々木志津磨に學び、頗る其の風を善くす著書若干、皆書法の事に係れり。

明浦宮鑑　伊勢の畫家なり、墨梅を畫きて甚だ清奇あり、遠く補之の風を學びて、尋常畫家の流にあらざるなり。

淺田上山　名は寛、字は子裕、六兵衛と稱す、上山は其の號、また大陸山人と號せり、江戸の畫家なり、細井廣澤に學んで書を善くす、著書若干あり。

淺井梅樓　名は貞良、字は士俊、梅樓は其の號、清田君錦の門人なり、また能書を以て聞ゆ、明和九年十月歿す、享年五十有三。

新井草春　舊名時成、字は白一、山城の國伏見の人なり、父を定以といふ、幕府に仕へて膳部の監督を司どる、草春は其の第三子なり、幼にして父に從ひ、駿府に遊びしが、後京師に住せり、容姿端麗、長ずるに及んで敏捷能く事を處す、當時淺井越後守盛政といへる人あり仕を辭して延齋と號し、以て醫を業とす、其の女を以て之れに妻はし、以て己が子となす、是に於いて醫を學びて大に上達す、其の他諸藝に達し、頗る多能の人なり、吉田に就いて射業を學び、大坪に騎を學び、新陰に劍を學び、小笠原に諸禮を學び、有樂に茶道を學び、紹巴に連歌を學び、今春に謠を學び、而して書を雲流に學ぶ、是等の諸技、大概其の蘊奥を極めざるはなし、延寶九年歿す、年七十六。

淺井忠　初名忠之丞、後忠と改む、下總佐倉藩士にして安政三年六月江戸木挽町に生る、明治八年國澤新九郎家塾彰技堂に入りて洋畫を學び、九年工部省美術學

校の創立に際し入校して研究せり、三十一年東京美術學校の教授に任せらる、翌年佛國へ留學を命せられ苦心惨怛遂に大成し洋畫界の泰斗と稱せらる。

饗庭篁邨　通稱與三郎、別に竹の屋と號す、東京の人、有名の小說家なり、曾て讀賣新聞に執筆し諷刺、世話物、滑稽等に獨特の妙致を以て名を江湖に博す、後東京朝日新聞社に轉ず、文章、俳諧を善くす。

安位寺　畫く所の鮮脫上人の像、安位寺に藏せりと云ふ、其の事歷年代等詳ならず。

新川溥　字は子學、竹堂と號す、山水を善くす、文化年中にして加賀の人なり。

阿部棕軒　福山の領主たり、字は子純、棕軒は其の號なり、備中守侍從に任せらる、天性畫を好み、大に沈南蘋の畫風を愛し、之れを臨摹して怠らず、遂に其の妙所を得たり、花卉鳥獸に巧なり、其の巧妙なるものに至つては、殆んど南蘋と相判別しがたきものあり、多くは皆設色にして水墨のもの少なし、また詩文を善くし、增山雪齋と其の名を等しうす、文政九年六月二十日歿す、年五十三。

阿部董琳　名は貫、字は董琳、江戸の畫家なり、董琳は字を以て知らる、號は養拙、通稱隼太郎。

天沼恒菴　名は爵、字は樂善、恒菴は其の號なり、父を淨遠と云ふ、性剛朴にして擊劍を善くし、好んで人の難を救ふ、是を以て常に財を散じ、家に毫金の蓄なし寛政の初年、恒菴を江戸神田に生む、八歲にして藤華園の門に入り、專ら書を學ぶ、又三浦淳夫に就いて經を受け、劉文翼に從つて詩を學ぶ、寛政甲寅の年歿す、年五十二。

秋月種樹　古香と號す、日向高鍋藩主、天保四年十月生る、學和漢に通じ、詩文を善くす、殊に書は最も善くる所なり、諸官歷任貴族院議員となる。

秋月天放　名は新、字士新、通稱新太郎、別に必山と號す、豐後佐伯藩士、天保十二年七月生る、秋月橘門の男にして詩文書を善くす、貴族院議員に勅選せらる。

秋山碧城　東京の書家、秋山義隆の二男、慶應元年二月田安藩邸に生る、名は純、字は儉爲、通稱隆道、別に雪堂、龍々齋、雲烟等の號あり、夙に書を能くす、明治十八年清國に遊ぶと三年遂に漢魏篆隸の六朝書法に精通せりと云ふ。

餘元澄　東菴、また松岳堂と號す、京師の人なり

天性孝悌に厚く、幼にして學を好み、書を能くす、且つ博聞强記にして雜家小說浮屠老莊の書に至るまで、一として通曉せざるものなし、市井弁利の事を以て、其の心志に涸さず、恰然として和歌を詠じ、且つ唐詩を賦するを以て無上の快樂となし、嘗て仕進榮達を希望せざるなり、又醫を能くするを以て、法橋に叙せらる、元祿十三年歿す、年五十一。

安藤素軒　名は爲實、字は亮、素軒は其の號、朴翁の長子にして、丹波の國千年鄕小口村の人なり、父の後を繼ぎて、伏見宮に事へ、右兵衛尉に任ぜらる、博雅淹通、最も本邦の典故に通ず、弟と丶もに水戸義公に仕へ彰考館の史局に參與せり、彼の義公の禮儀類典を撰するや、擢さんでられて總裁となる、又和歌を好みて之れを能くし、能書家の聞ゑあり。

安藤東野　名は煥圖字は東壁、通稱仁右衛門、東野は其の號なり、下野の人にして元瀧田氏、幼にして父を喪ひ、去つて東都に出で、太宰春臺と丶もに、中野撝謙の門に學ぶ、後安藤氏の養子ところとなる、後物徂徠に就いて學び、詩文雋拔、兼て音律に通ぜり、又書に巧なり、甲斐侯柳澤吉保に仕ふ、正德元年、仕を辭して江戸駒込に隱栖す、享保四年四月、吐血して歿す、年三十七是れ刻苦精勵、其の度に過ぎたるの致す所なりと云ふ。

安藤廣重　名は元長、廣重は其の號なり、幕府防火同心某の子にして十兵衛と稱す、後德兵衛と改む、一に一立齋と號す、浮世繪の畫人なり、江戸中橋大鋸町に住し、岡島林齋に就いて畫法を學び、後また歌川豐廣の門に入りて浮世繪を修む、最も景色の圖に功なり、又東海堂歌重と號して狂歌の名手なり、當時狂歌師の歌集、其の他廣重の筆に成れるもの甚だ多し、安政五年九月六日歿す、年六十二、其の門人重宣襲はれて二世廣重と稱せしが、未だ幾ばくとなくして之れを離別し、同じく門人重政、繼いで二世となる。

安藤龍淵　名は宣、通稱傳藏、幕府の吏にして書家なり、初め淺草に住し、後下谷根岸に隱栖す、其の居を號して晩翠塾と稱す、是れ彼の有名なる御行の松に近きを以ての故なり、夙に書を好み、市河米菴に就きて學び能書の聞ゑ高し、而して特に隸體に妙を得たり、小野照崎神社の扁額を書す、其の筆力秀潤豐富にして且つ雅致あり、また平生古器物を嗜好し、鑑定に精しかりき、明治十七年八月三十日歿す、年七十九。

安藤朴翁

名は定爲、通稱新五郎、了翁の子にして丹波の國千年鄉小口村の人なり、幼にして父を喪ひしかは、母河合氏專ら家庭の敎育を監督し、讀書を勵ましむ、當時版本甚だ少なく、從つて之れを得ること甚だ難し、依て旦つ讀み、旦つ寫せり、弱冠の頃京師に出で、五條爲景に仕へて經義を問ひ、木下長嘯に從ひて和歌を學ぶ後從五位下右京亮となる、凡そ儒學書迹より琴棋琵琶に至るまで、悉く之れに通曉せざるはなく、且つ人と爲り端厚にして氣力あるを以て大に愛敬せらる、晩年致仕して鄉閭に歸り、剃髮して朴翁と號し、俗塵を絕ちて風月を樂しむ、常に陶淵明を欣慕し、朝夕其の集を繙き、自から歸去來の畵を寫し、野田雲竹をして之れに其の辭を書せしむ、而して之れを壁間に揭げ、或ひは琴を皷し、或ひは笛を吹き、或ひは茶を煮、或ひは國歌を賦し、或ひは書畵を弄ひ、悠遊自適、以て老後の餘生を送れり元祿十五年八月歿す、年七十六。

雨森牛南

名は宗貞、字は牙卿、牛南は其の號、また一に松蔭と號す、越前の儒者にして醫官たり、初め山本北山に學び、經史に博覽なり、又詩に巧にして書を善くせず、當時詩豪を以て稱せらる、文化十二年十二月歿す、年六十、著書若干あり。

雨森芳洲

名は俊良、又誠淸、字は伯陽、芳洲と號す、又絅尙堂の別號あり、對馬侯の文學なり、平安の人にして江戸に出で、木下順菴の門に入りて學ぶ、才藻卓絕、順菴之れを稱して後進の領袖となす、遂に其の推薦に依りて對馬侯に仕へしなり、芳洲外國の語に通じ、每に韓人と話說するに譯官を用ゐず、韓人嘗て譏れて曰く君能く諸邦の言語に通ず、而して殊に日本に熟すと、正德辛卯、朝鮮來聘す、當時新井白石能く用ゐれ、專ら其の事を司どり、多く舊例を改めて新式を作る、從來朝鮮より幕府へ呈せし書には、日本國大君の稱を以てせり、白石之れを改めて日本國王と稱せしむ、是に於いてか、芳洲乃ち書を白石に與へて大に其の非を論ず、然れども白石之れを容れざるなり、白石の如く碩學にして斯の如き不法を爲す、實に嘆ずべき哉、而して芳洲もと白石と同じく順菴の門下より出づ、而して相識ること三十年、是れより交情相協はず、芳洲嘗て橘窓茶話を著はし、惺窩羅山より吾が師順菴及び其の門生社友のものを擧ぐ、然れども獨り白石を擧げず、亦之れを以てなり、年八十一にして始めて和歌に志し、古今集を誦すること一千回

又自から賦すること一萬餘首、人其の精力の非凡なるに驚く、又書を善くせり、寶永五年正月六日歿す、年八十八。

荒木吳橋　名は翹之、字は公楚、吳江の子、江戸の書家なり、また書畫と號す、文化八年十二月二日歿す、年五十五。

荒木吳江　名は克之、字は子盈、通稱長藏、東水と號す、江戸の書家なり、寛政五年五月二十日歿す、年六十五。

荒木是水　江戸に書家なり、志津磨の門に遊びて書法を學ぶ、後遂に一家を成せり。

荒木素白　有名の書家なり、名は光辰、通稱三次、後內膳と改む、姓は源氏、母は杜氏、素白九歲にして福山城主水野勝成と仕ふ、年十九、同僚某と爭論し、遂に去つて伊勢に赴むき、津の城主藤堂高虎に事ふ、後勝成來りて高虎の宴に會す、勝成素白を見て大に憤悲し、高虎に請ふて之れを得んとす、高虎肯せず、勝成ます〳〵怒る、素白去つて京師に遁る、勝成之れを追はしめたるも、得ざるを以て國に入ることを禁せり、爾後竄匿すること數年、遂に備後鞆津に至り、勝成に書を上つて首罪を請ふ、勝成之れを哀み、宥して京師に歸らしむ、是に於いてか、剃髮して禪を靈隱寺一絲和尙に問ひ、名を龐空素白と改む、勝成之れを聞き、復た召して祿を與へしが、後卒するに及んで辭し去る、後年高虎の嗣子、素白を招けども辭して應せず、素白常に書を好み、藤本敦直を師とし、其の名蹟頗る高し、世に之れを稱して上代風の中興とす、而して其の書體三跡の中に入ると云ふ、晩年病を得るに及ぶや、權大納言藤原弘資、使を遣はして慰問懇到、他の之れを慰問するもの陸續として絕へず、是れより先き、後水尾天皇、素白に詔して團扇及び色紙に書せしむ、素白之れを書きて上つるに、天皇大に旨に愜ひしと云ふ、貞享二年春歿す、年八十六。

荒木維岳　字は嵩夫、吳井と號し、八郎と稱す、江戸の書家なり、明和四年七月二十六日歿す。

有川梅隱　薩摩の藩士なり、傍ら書を善くす、明人の法に則りて墨梅に巧なり。

有坂閑齋　狩野派の書家なり、畫法を狩野常信に學ぶ。

粟田口隆利　高山と號す、弘化二年生る、住吉弘貫の門人にして土佐派の畫家なり、山水を善くす。

淡島寒月　寶受郎と稱す、安政六平十月生る、小林椿岳の門に入つて畫を學ぶ、人物に工みなり。

荒木淵齡齋　名は利澄、通稱丈太郎、安政四平正月生る、菊川淵齋の門に入つて學ぶ、山水花鳥に巧なり。

新井勝峰　狩野勝川の門人にして畫を善くす、花鳥に巧なり。

跡見花溪　名は瀧、父を槐園と云ふ、攝津の人なり天保十一年四月生る、日根對山の門に入つて畫を學ぶ、又詩に巧なり、書も亦之れを善くせり、明治五平女學校を東京神田に開き、以て子弟を敎育す、其の董陶宜しきを得たるを以て、貴紳の輩、己が子弟を托して其の門に入らしむるもの多し、名聲大に揚ふ、畫は南宗風にして山水は殊に能くする所なり。

荒木寛一　名は蠅、字は子文、梅隱齋と號す、文政十年五月生る、父寛快及び江崎寛齋に就いて畫を學ぶ博覽會及び共進會等に出品して褒狀を賜はれり、南宋派にして山水を善くせり。

荒木寛友　名は鐸、寛一の子なり、嘉永二年十二月生る、父に畫を學びて能くす、又油畫に巧なり。

荒木十畝　通稱悌三郎、明治五年九月肥前大村に生る、寛畝の養嗣となる、畫を養父に學び家を襲ぐ。

阿部柳所　通稱寅藏、天保十三年四月生る、張鳳溪の門に入つて畫を學ぶ、山水を善くす。

阿部閑山　名は尙光、天保二年八月生る、佐藤山齋の門に入つて畫を學ぶ、山水に巧なり。

小豆澤碧湖　名は亮一、嘉永元年三月生る、中島來章の門人にして山水に巧なり。

荒木寛畝　名は吉、達花と號す、田中永周の男なり畫を家庭に學びて善くす、人物に巧みなり、又油畫を善くす。

天野鳴鳳　名は良雪、天保三年九月生る、山崎蕉泊の門人にして沈淫流の畫家たり。

安藤竹堂　東京の人なり、南宋派の畫家にして花卉を善くす。

安藤廣重(二世)　通稱德兵衛、一立齋と號す、弘化二年十二月生る、父を後藤武平と云ふ、廣重後出で、安藤氏を嗣ぐ、畫を好みて初代廣重の門に入る、研究怠らず、遂に師の名を嗣ぎて廣重となる、景色畫に巧なり。

赤星閑意　文政十一年四月生る、矢野龍谷の門人にして人物を畫くに巧なり、桃仙と號す。

朝岡且嶠　通稱小傳二、文政六年十月生る、長谷川雪且の門に入りて畫を學ぶ、山水を善くす。

安藤廣近　通稱爲吉、天保六年七月生る、畫を好み父廣近に學ぶ、人物を善くす。

新井年雪　通稱周次郎、文久三年二月生る、一松齊芳宗の子にして畫を善くす、初め芳年に學ぶ、又家庭の敎を受けたり、人物を畫くに巧なり。

跡見王枝　勝三の女なり、示言莊と號す、長谷川玉峰、望月玉泉の門に入りて畫を學ぶ、京都女學校及び同畫學校の敎師たり。

安部井磐根　二本松藩士、天保三年三月生る、維新前より國事に盡す、後衆議院副議長となる、和歌を善くす。

淺井蘆洲　名は敬、字は德海、越後の人、南宗派の畫家なり、明治三年五月歿す。

朝日淡齋　名は明、字は子明、淡齋は其の號なり、又淡莊、子德莊、敬書堂の別號あり、美作の人にして京師に住せり、應擧の門人にして人物に巧なり、又書を善くす、殊に草隸に工なり。

安達吟光　通稱平七、松齊と號す、畫家なり、人物を能くす。

阿部昇湖　通稱三次郎、弘化三年十月生る、菊池容齊の門に入つて畫を學ぶ、人物に巧なり。

荒井柳坡　通稱甚右衛門、嘉永三年五月生る、菊池容齊の門人にして畫家なり、最も人物を善くす。

◉さ之部

嵯峨天皇　人皇五十二代の帝にまし〳〵て桓武天皇の皇子、延舊五年九月七日御誕生し給ふ、平城天皇の同母弟なり、天皇文武に達し給ひ殊に書を能くし給ふ、空海、遍勢と世に稱して本朝の三筆と云ふ、承和九年七月十五日崩御し給ふ、御年五十八。

西郷隆盛　鹿兒島藩士なり、舊吉之助と稱し、南洲と號す、幼にして穎悟、近習役となる、維新の際東奔西走、遂に能く其の中興の大業を爲すに與かつて力あり、朝廷厚く之れを賞し、正三位に叙し、陸軍大將に任ず、明治六年十月、征韓論の議相合はざるを以て辭職して故山歸り、遂に明治十年の兵を擧げて、遂に城山に露と消ゑ失せぬ、南洲詩文に長じ、書に巧なり、世に其の遺跡少なからずといへども、世人之れを珍重す。

西行法師　佐藤氏、名は義淸、鎭守府將軍藤原秀鄕

の孫にして、左衛門尉康清の子なり、家世々武を以て顯はる、義清亦勇敢にして射を善くし、頗る韜略に通せり鳥羽上皇に事へて北面の士となり、左兵衛尉に任せらるる然れども義清夙に遁世の志あり、上皇之れを愛して檢非違使に任せんとせしも、其の罪人を逮捕するの事を以て之れを辭せり、此の時鳥羽の新宮落成せしかば、上皇一時の名聲をして其の障子に畫及び和歌を題せしむ、義清また其の撰を蒙ぶりて和歌十首を題す、大に上皇の旨に合ひ、朝日丸と名づくる御劍を賜はる、人之れを賀す、義清毫も樂しまず、族人憲康の俄に歿せるを聞き、遁世の念、愈々禁じがたく、遂に嵯峨に入りて剃髮し、名を西行と改む、又一に圓位といへり、是れより東西南北を周遊し、其の足跡の至らざる所なしと云ふ、和歌を善くし、兼ねて書に巧なり、建久元年二月十六日、京師に寂す、年七十三、著書若干あり、皆和歌の書なり。

在上　畫家なり、朱雀天皇に事へて能畫の聞ゆあり、承平年中掃守と、もに藤原純友の首を畫き、以て天覽に供せりと云ふ。

蔡徵　野際氏、紀伊の人、文人畫家なり、野呂介石に學びて山水を畫く。

相泉　周文の弟子、泉州の人にして畫家なり、常に堺に住し、彌陀の像を畫く、金碧を用ゆるに精しく畫亦風韵あり、後高野山の麓に歿せり。

坂内寛哉　畫家にして蒔繪の巧手なり、有名なる柴田是眞の如き、此の門下より出でしなり、天保六年四月二十日歿す。

作山　畫家なり、雪舟の筆意より出で、墨畫の花鳥及び山水佛像を畫けり、又作仙なる畫家あり、或ひは同人ならんか、今姑く疑ひを存して此に掲ぐ。

酒井道一　東京の畫家、山本素堂の次子、弘化二年十二月江戸に生る、通稱道一また雅號に用ふ、別に雨華庵細眞と號す、抱一の衣鉢を繼ぎ雨華庵第四世となる、光琳派の名手なり。

酒卷耕漁　通稱辨之助、別に年久、湖畔等の號あり東京の畫家にして明治二年三月生る、初め芳年に就て學ぶ、芳年歿後月耕を師とす、亦楓湖の門に入る、能樂の圖を得意とす。

佐久間棲谷　東京の畫家、幕臣佐久間長宜の女、明治元年十月生る、滝和亭に就て南畫を學び女流の名手と稱せらる。

齊藤芳洲　東京の書家なり、通稱利恒、字子常、下総佐倉藩士、嘉永五年四月生る、晋唐の書法を研究し大に得る所ありと云ふ。

佐久間象山　名は啓、一名大星、字は子明、通稱啓之助、後修理と改む、松代藩士なり、學和漢に精通し、亦夙に洋學を究む、兵術に精し、元治元年七月十一日刺客の爲めに京都に斃る、詩文を能くせり。

西郷孤月　東京の畫家なり、橋本雅邦の女婿にして最も有望の人なり、好んで虎を畫く。

佐々木方壺　名は禮、字は伯厚、方壺は其の號なり、明石の人、幼にして一家を頓覆するに會ひ、年十三にして身を親族浮屠に托せり、長ずるに及んで磊落不羈、沙門に身を委すべからず、遂に之れを脱して學問に志し、笈を負ひて筑前に抵り、龜井南溟の門に入りて學ぶ、業成るに從つて四方の志あり、天下を周遊するの志を起し九州を歴遊し、中國四國を經て本土に至り、遂に奥羽を極む、行々山水の秀靈なるものに會へば則ち、之れか詩となりて發す、是れより四方の碩學大儒に交り、談論風生、意氣甚だ昂る、書を請ふものあれば、酒を命じて後揮毫す、醉墨淋漓として怪岸韻斜、殆んど讀ひべからず

是れ多くは皆書なるを以てなり、又其の最も巧とする所なり、晩年江戸に出で、橋上に佇立し、瓢より酒を酌み之れを飲みながらにして而して歿す、年七十。

笹山養意　狩野派の畫家なり、畫法を狩野常信に學ぶ。

笹村良昌　蘇園又野雞花園と號す、和歌を能くす。

佐瀬得所　名は恒、字は子象、得所は其の號、又別に松城と號す、通稱八太夫、東京の書家にして會津の人なり、幼にして書を嗜み、又之れを善くせり、終世書を以て名を成さんと欲し、嘗て長崎に赴き、清客と筆法を論ず、後遂に清國に航し、普く名家を訪ひ、一意專心、單に書法を研究し、二年にして還る、是れより東京に寓し、書法を授けて日月を送る、其の書する所の修齋廉節の四字、嘗て天覽を經、描金梅花筆一、畫金龍墨両笏を賜はる、蓋し異數とする所なり、得所感泣、以て畢世の名譽之れに過ぐることなしと云ふ、得所是に於いて、其の居を名づけて梅龍書屋と曰ふ、宴を江東の一樓に張りて、親戚故舊を會し、拜領の御物を拜觀せしめ、以て席上蒼龍の二字を作る、方一丈有餘、腕力勁健、潑墨淋漓觀るもの大に感嘆す、凡そ書に於いては悉く其の眞髓を

得、而して殆んど通曉せざるはなし、人と爲り樂易眞率未だ曾て時事を可否し、人を毀譽せしことあらず、而して榮枯得喪を忘る、故に其の書も亦、冲澹雅幽、修飾の憾毫もあることなし、左院に入りて仕官せしが、幾ばくもなくして罷め、專ら教授を以て業となす、其の門に集まるもの二千有餘人、實に盛なりと謂ふべし、明治十一年一月二日歿す、年五十七。

佐藤蘭齋　名は國、字は子瑩、仙臺の人にして書家なり、始め下田氏、後本姓に復す、太宰春臺に就いて儒を學ぶ、天明七年七月十一日歿す。

眞田謙山　名は行直、通稱宋之助、謙山は其の號なり、書家にして德川幕府の臣なり。

佐野東洲　名は潤、字は君澤、文介と稱す、江戸の書家なり、文化十一年三月十日歿す。

佐野渡　姓は藤原、田沼氏、名は道信、通稱小右衛門、狂歌師にして書を善くせり、江戸青山久保町に住し、質商を營めり、はじめ狂歌を朱樂菅江に學ぶ、狂名を國府呑義と云ふ、後に『さのゝわたり』と改む、竹を畫くに妙を得、畫名を統竹亭淇園、看香羅田々、桑山子等の號あり、又待伴舍、芙蓉漁等の別號あり、天保八年正月元日剃髮して元日坊立春と戲號す、此の年六月病に罹り歿す、享年七十六。

澤田東洋　名は哲、字は文明、通稱文次郎、書家にして東江の孫なり、家庭に學びて書を善くせり。

澤井志津磨　名は居敬、字は史頭、穿石と號す、大阪の書家なり、通稱志津磨にして此の名大に顯はる。

猿山叡麓　名は秀盈、字は季明又進々、江戸の書家なり、篠田行休の門に入り、大橋流の書を善くす、安政九年正月八日歿す。

猿山龍池　名は周曉、太平山人と號す、江戸の書家なり、寛政四年十月二十五日歿す。

佐脇英之　名はまさ、嵩雪の女、江戸の書家なり、家法を學んで書を善くす、寛政三年六月三日歿す。

齋淵西堂　鎌倉長壽寺に西堂の筆に成れる一の書幅あり、寫照を善くす。

佐伯季景　大雷會御屏風を畫く、大藏史生に任ず。

左京太夫女　昭明門院に仕ふ、藤原隆信の女なり、性畫を好み、之れを善くす、今昔物語の畫を畫けり。

佐藤玄覽　名は源助、文化九年二月生る、初め谷文晁に從いて畫を學び、後鈴木南嶺の門人となる、圓山派

にして人物を善くせり。

三枝雲岱　小野元鼎の子なり、三枝氏の嗣となる、岡田閑林、日根對山の門に入りて畫を學ぶ、南宋派にして山水花鳥を巧みにす。

榊原文翠　名は長敏、長基の子なり、遠坂文雍に就いて畫を學ぶ、文晁の風を摸して人物に巧なり。

佐竹永湖　永海の子なり、初め冲一峨に就いて畫を學び、後父に從いて研究す、人物に巧なり。

佐竹永邨　通稱竹松、天保十二年二月生る、佐竹永海の門人にして畫を能くす、花卉に巧なり。

佐藤靜山　名は弘、安政九年七月生る、父山齋に就いて畫を學び、花卉を能くす、南宋派の畫家なり。

齋藤梅園　名は勝任、天保六年八月を以て戸江に生る、永峰晴水の門に遊びて畫を學び、後また荒木寛一の門に入る、南宋派の畫家にして花鳥を善くす。

相馬仙齡　一に陸相邦と號す、通稱邦之助、安政六年六月生る、平尾魯仙の門人なり、花鳥を能くす。

佐藤寒田　名は秀男、安政二年十二月生る、十市玉洋の門人にして山水を能くす、南宋派の畫家なり。

齋藤秉堂　名は彝、但馬の人なり、父崎菴に畫を學ぶ、南宋派にして山水を善くす。

齋藤海信　通稱勘五郎、佐梁齋永明と號す、狩野永雪及び邦信法眼に就いて畫を學ぶ、山水に巧なり。

◉さ之部

紀貫之　藏人望行の子、和歌を以て稱せらる亦書を能くす、其著土佐日記大に世に行はる、天慶九年薨ず

及菴　武下氏、及菴と號す、探幽の門人にして奥州に住せり、畫を善くす、延寶の頃の人なり。

牛雪　牛雪は何國の人なるを詳にせず、雪村に學びて畫に巧なり。

菊池溪琴　名は保定、字は士固、溪琴は其の號、後海莊と改む、通稱孫左衛門、紀伊の國有田郡栖原村の人なり、詩家にして能書なり、武藝を好み、最も意を海防に用ゆ、初め大窪天民に從ひ、後四方の名士と相唱和す明治十四年一月十六日東京に歿す、年八十三。

菊池澹如　名は敎中、字は介石、通稱佐野屋孝兵衛澹如は其の號なり、下野の國宇都宮の人、父を淡雅と云ふ、家道富裕商業を營む、江戸濱町に支店を設く、甚だ盛大なり、澹如幼時より此に來り住す、性書を善くし、

また畫を好み、多く古今の名跡を購ひ、之れを珍重して朝夕臨摹す、年僅に弱冠、其の畫く所のもの、往々古名家を凌ぐ、見るもの之れを嘆賞せざるはなし、而して常に客を好むを以て、此に出入して清談するもの多し、濟如已が富貴に誇らず、貴賤上下の別なく、快く之れを延見す、然れども其の自から奉するや、極めて儉素にして人誰か驚かざるものあらんや、而して天資慈惠に富み、常に窮乏孤獨を哀れみ、以て樂しみとなす、其の嘗て鄉里にあるや、一夜僕を率ゐて潛に貧家を窺ひ、金を投じて去る、人其の誰たることを知らざるなりとぞ、文久二年八月八日歿す、年三十五。

岸田等雪　狩野派の畫家なり、畫法を狩野常信に學ぶ。

希世靈彥　村菴と號す、畫僧なり、斯文宣の法嗣とす、詩文當世に名あり、又山水及び戲畫を成す、長享二年六月二十六日寂す、年八十六。

奇堂　畫僧なり、可翁に學びて能く相似たり。

北川春成　明溪と號す、京師の畫家なり、諸流に涉り、最も摸寫に長ず、著はす所扁額軌範世に行はる。

北山寒巖　名は孟熙、字は文奎、江戸の畫家にして幕府の御先手與力なり、畫法を漢人に取り、文晁の師なり、寛政十三年正月十八日歿す。

北山晋陽　名は通良、江戸の畫家なり、享和元年十一月十六日歿す、四谷長善寺に葬る。

北山林翁　名は壽啓、理菴と號す、江戸の畫師なり明和四年四月二十七日歿す。

北尾政美　重政の門人にして有名の浮世畫師なり、鍬形氏、通稱三次郎、杉翠と號す、後蕙齋、また紹眞と改む、狩野派の畫風を好みて一家を成す、江戸の繪圖を一目して以て委しく分明ならしむる樣、其の畫樣を發明し、之れを公にして大に世人の好評を博せり、其の圖、神田明神に額として奉納せり、又職工の爲めに其の雛形の繪手本を畫くこと多く、而して其の大に行はれしは、此の人より始まれり、晩年松平越前侯の藩士となり、出版發賣の繪を廢し、落髮して鍬形紹眞と云ふ、文政七年三月歿す、遺跡の版世に多し。

木戸孝允　維新の元勳なり、其の事歷は世既に之れを知る、本姓和田、通稱小五郎、孝允は其の名、松菊と號す、幼にして桂氏に養はる、依て桂小五郎と云ふ、後木戸準一郎と改む、學術氣節を以て一藩を皷舞し、奇才夙

に成る、明治維新の際、東奔西走、以て中興の大業を成す、孝允詩文を善くし、又書に巧なり、世之れを珍重す明治十年五月二十六日歿す、年四十四、天皇侍從鍋島直彬をして正二位を贈り併せて金幣を賜ふ。

紀　時文　有名の歌聖貫之の子なり、和歌を善くしまた兼ねて書を善くす、大膳太夫内藏助を歴て、從五位上に至る。

衣川　幸緒　字は白觀、浪花の人にして書家なり、幼にして折田氏に養はる、伊勢龜山の藩主板倉氏に軍へ、氏を衣川と賜はる、四十二歳にして疾病に罹り、仕を辭して京師に移居し、丹青を弄ぶ、而して孜々たらず、倦めば則ち琵琶を彈ず、然れども畫名一時に轟く、且つ學和漢に渉り、殊に該博なり、寶歴三年四月二十一日歿す年五十五。

木下長嘯子　名は勝俊、初め字を大藏と曰ふ、肥後守家定の長子なり、幼より豊臣秀吉に仕へ、頗る其の恩遇に浴す、從五位下に叙し、若狹守に任せられ、氏を羽柴と賜はる、龍野城主となる、天正六年從四位下に叙し、侍從に任せらる、後洛東靈山に潛居し、名を長嘯子と改め、剃髮して入道す、是れより專ら風月を娛して、吟詠に耽る、後又大原野に移り、天哉翁と改む、和歌和文に巧にして能書なり、慶長三年六月歿す、年八十一。

紀　平洲　名は德民字は世馨、平洲は其の號なり、又一に如來山人と號す、米澤侯の儒官なり、もと細井氏、初め甚三郎と稱す、姓は紀、尾張の人なり、家世々農を業とす、平洲幼にして穎悟、學を好む、延享年中名古屋に出で、秋元淡淵に學ぶ、後長崎に遊びて唐音を學ぶ、居ること三年にして名古屋に歸り、帷を下して敎授す、後年尾州侯に聘せられて儒官となる、平洲詩を善くし、また書に巧みなり、遺跡往々見るところなり、享和元年六月二十五日江戸に歿す。

木村　雅經　立嶽と號す、書家なり、文政八年を以て越中の國富山に生る、十二歳のとき、江戸に出でゝ繪所に入學し、狩野伊川晴川及び勝川の三法眼に從ひて、專ら書法を學び、且つ深く自から研究する所あり、爾來刻苦すること三十餘年、幕府の両本丸御用を勤めり、明治維新の後、圖書局勸農局を始め、皇居及び東宮御所等の繪畫に力を盡したるを以て、其の名の顯はるゝとゝもに大に世の賞贊する所となる、而して其の畫風は、唐宋元明に倣ひし、米國人にして其の門下生たるもの數人あり

第二回博覽會に出名して妙技賞を受け、次で第三回博覽會に出品し、其の畫の勁健細微なる、觀るもの嘆賞せざるはなし、明治二十三年七月九日、肺患に罹りて歿せり年六十四。

慶　耀　大和の人にして高僧なり、淨辨律師の男なり、幼時圓城寺の慶遥法師に從ひて薙髮し、勤學多年遂に高德となる兼て、筆札を善くし、梵漢ともに甚だ巧なり、耀後年宋に入り梵字の曼阿羅を寫しゝが、天竺の三藏法師之れを見て大に歎賞し、また楷書も其の妙とする所、宋僧大に之れを珍重せりと云ふ、また和歌を善くし、父の意を繼ぎて出藍の譽高かりしとぞ。

清　勝　大和繪師なり、鳥居清長の門に入りて學ぶ、俳優の似顔又は劇場の看板を畫けり。

玉　山　石田氏、名は尙友、大阪の人なり、法橋に叙せられて、法橋玉山と號す、畫家なり、而して近世版刻密畫の開祖たり、初め關月に就いて畫法を學び、後一家の風をなせり、著述の畫頗る多し、當時京都の版畫は、大概皆玉山の手に成らざるものなく、一時の名手と賞せらる、天明より文化の間に渉る、門人頗る多し、岡田修德なるものあり、二世玉山の名を繼ぎ、江戸神田に住し、盛に畫を弘めり、然れども版行のものは毫も畫かざりしと云ふ、畫風初世玉山と相伯仲せり。

玉室宗璠　玉室珀の法嗣、大德寺百八十五世の住僧なり、春睡と號す、山城の人なり、畫を善くす、寶文八年十一月十八日寂す、年六十九。

玉堂清暇　畫家なり、法を明晁に學ぶ、設色白鶴及び花果衆鳥を善くす。

玉峰智琢　名は智琢、字は玉峰、駿州清見寺の住僧なり、畫を善くし、又書を巧にす、永享中寂す。

玉　韜　畫女なり、八田古秀の門に入りて學び、能く其の畫法を得たり、或人曰ふ、玉韜女と同人なりと然れども其の畫風に依て考ふれば異人なり、姑く疑を存して此に揭げぬ。

清原雪信　久隅守景の女にして狩野探幽の姪孫なり征貴と號し、畫を善くせり、清原氏に嫁す、畫法を探幽に學びて巧なり、元祿十一年歿す、通稱雪、雪信は畫名なり。

清　政　鳥居派の大和繪師なり、鳥居清長の門に入りて學ぶ、俳優の似顔又は劇場の看板を畫けり。

鬼頭道恭　臣勢派の畫家なり、尾張名古屋の人、通

稱玉三郎、畫法を岡田爲恭、北村秀隆に學ぶ、人物を善くす。

木村金秋　土佐派の畫家なり、尾張名古屋の人、名は元恒、本姓は橋本氏、木村氏に養はる、依て其の氏を冒す、森高雅に就いて畫を學ぶ、人物花鳥を能くす。

木村經則　立峰と號す、狩野派の畫家なり、立岳の長子なり、山水を畫けり、東京の人なり。

木村經泰　立岳の次子にして立峰の兄なり、畫を父に學ぶ。

木村耕嵓　初め前田半田に從ひて畫を學び、後中西耕石の門に入りて研究す、東京に住す、山水を善くす。

木村香雨　名は長明、天保十三年十二月生る、草野東甚の門人にして花卉を善くす、又鐵筆に妙なり。

木村春洞　南宋派の畫家なり、文政五年五月生る、浦上春琴の門人にして人物花鳥に巧なり。

喜多武一　父清武に學びて畫を善くし、探齋また五清堂と號す、彫刻を能くせり。

菊池芳文　幼名常次郎、字は公紀、芳文は其號なり後通稱とす、文久二年九月大阪に生る、初め滋野芳園に畫を學び後幸野梅嶺の門に入り研鑽怠らず遂に其名大に顯る。

岸田吟香　精錡水を以て有名なり、吟香は其號、後之を通稱とす、家を樂善堂と稱し別に海上賣樂翁の號あり、天保四年美作に生る、吟香が新聞發刊の鼻祖たるとは人の知る所なり、常に文事を好み詩文に兼ねて書を能くす。

ゆ之部

幸仁親王　親王は後西院天皇の第三皇子なり、出で、高松宮を繼ぎ玉へり、寛文十年八月、花町殿故第に移り、兵部卿に任せらる、同十二年五月、改めて有栖川宮と稱す、式部卿に進み、一品に叙せられ、牛車に乘りて宮中に出入することを許さる、元祿十二年七月薨ず、年四十四、親王嘗て和歌及び書を能くし、又畫を好み、狩野永納に就いて畫を學ぶ、其の畫く所にして世に傳ふるもの少なからず、皆巧妙なり。

結城清風齋　正明と號す、狩野雅信の門生たり、人物を善くす、天保七年正月生る、東京の人なり。

め之部

妙　菴　名は幸賀、字は妙菴、細川藤孝の三男にして僧となり、愛宕山福壽院に住す、三條流の書を善くす。

妙　觀　命婦たり、齢老七年從五位上を授けられ神龜元年、姓何上忌寸を賜ふ、天平九年、正五位下に叙せらる、資性和歌を好みて之れを善くし、頗る其の蘊奥を極む、また書に工なり。

妙　船　尼　有名の俳仙不角の妹なり、江戸の人、長じて松村氏に嫁す、人と爲り貞操にして諸藝に通じ、解せざるもの殆んど無しと云ふ、殊に和歌に工に、且つ書を善くせり、晩年夫に別れし後、尼となりて看經念佛の外、更に餘念なかりしと云ふ。

◉み之部

三浦竹溪　名は義質、字は子彬、初め名は良能、小五郎と稱す、後平太夫と改む、竹溪は其の號なり、江戸の人、幼にして學を好み、物徂徠に從つて學び、寶永二年十二月、將軍吉綱の命に依りて孟子を進講す、旨に稱ひて時袍を賜はる、天資穎敏、博識該通、最も經術に長ず、又書を善くし、特に楷書に巧みなり、寶曆六年五月九日歿す、年六十八。

三浦梅園　名は晋、字は安貞、梅園は其の號、また季山、洞山、鑾山等の別號あり、豐後杵築の人なり、幼にして穎悟、はじめ綾部絅齋に從ひて學を講じ、年十七にして豐後中津に赴ひき、藤貞一の門に入りて學ぶ、後才の名夙に其の門に鳴る、常に天地造化の理を究めんと欲し、寢食を忘るゝに至る、年三十にして始めて天地に條理あることを知り、人に語つて曰く、天地は唯是れ一氣物のみ、氣外に物なし、一條の妙理宇宙に貫徹し、玄界際涯なく、而して神化測られずと、是に於いてか、志ます〳〵堅く、學いよ〳〵進む、梅園自から率ずること薄く、餘財を蓄へ、米穀を積み、之れを貸出して、豐歲に息を入れ、凶年に施す、依て民安きを得たり、而して猶ほ之れに類するの德行少なからず、諸藩其の儉德を聞き、之れを召さんとするもの多し、然れども恐く應せずして固辭す、杵築侯幣を厚くし、餌を卑うし、以て之れを招く、梅園其の鄕土の藩たるを以て出づ、侯太に悅び遇するに家老の格を以てす、寛政元年三月十四日歿す、年六十七、詩を善くし、又書に巧なり。

三木東洲　江戸の書家なり、其の年代事歴等詳なら

す。

溝口源谷　名は成住、庄司と號す、源谷は其の號、また後嘯齋、後嘯軒と號せり、曉谷の子にして江戸の書家なり、文化甲戌九月十三日歿す、年三十三。

溝口千谷　名は成住、字は子誠、莊司と號す、江戸の書家なり、もと美濃の人、松野龍谷の門人なり、寶暦十年八月二日歿す、年六十五。

三谷永玄　狩野派の畫家なり、はじめ仁左衛門と號す、狩野安信の門人なり。

三谷永恕　狩野派の畫家なり、狩野主信の門人なり

三谷永伯　狩野派の畫家なり、はじめ興助と稱せり狩野安信の門人なり。

三谷東亭　攝津尼が崎の商賈某の子なり、幼時學を好み、又書畫を善くす、性多病、時々疾病に罹り、然れども曾て業を廢せず、故に病いよ〳〵増發す、母大に之れを憂ひ、知人に托し、窃に遊里に遊ばしむ、初め之れを辞したりといへども、終に自から進んで狹斜に入り、立花太夫の艶姿に迷ひ、數千金を抛つて之れを落籍せしむ、然れども猶飽くことを知らず、又千町太夫の償を償ひて、吾が家に連れ來り、桃櫻相並ぶ、而して產を破り大阪北野に移り、両女をして尼とならしめ、僅に其の日を送りしが、後病んで歿せり、是に於いてか両女ともに洛東の某寺に入りしと云ふ。

水野珉山　名は子淳、眠山は其の號、また絅齋の別號あり、尾張春日郡新井の城主水野又太郎の後裔林太夫某の第三子なり、資性弘量卓落、小節に拘はらず、幼にして學を好み、また能書の譽あり、常に法帖を嗜みて倦まず、歴任して普請奉行となり、老いて小普請隊長となる、享保十九年八月歿す、年八十九。

水野尾正眠　名は尨、字は眉公、大阪の醫師なり、兼ねて詩及び書を善くす、また篆刻に巧なり、高芙蓉と其の技を比して伯仲なし、然れども人之れを知るもの稀なり、貧困に迫りしが後、奈良に移りて死す。

源顯仲　右大臣顯房の子なり、從三位左京太夫兼神祇伯に至る、和歌を巧にし、兼て書を善くす、保安四年薨ず、年八十有一。

源家増　洛東青蓮院の什物に、鎌足、定惠、不比等の三像あり、一幅となる、是れ家増の畫く處にして、其の筆法土佐風に類せり、而して其の墓所は、南禪寺中天授菴にあり、其の石面には、元龜二年正日十二日と刻

せり、京師に住せし人ならんか。

美馬櫻水　名は譜、字は和甫、勤王家なり、阿波の國美馬郡々里村の人、僧となりて土佛と稱し、後君田と云ふ、尊攘の說を唱へ、幕府の捕ふるところとなる、明治維條の際に至りて赦さる、明治七年七月歿す、年六十三、詩文及び書畫を善くす。

珉江　初め縫箔を爲し、後浮世繪師に轉ず、摺込の彩色を發明し工夫し、而して大に世に行はる、寶曆明和の頃の人なり。

珉和　平安の畫家なり、畫法を岸駒に學びて善くす。

三畠上龍　亦乘良と稱す、京都の人、初め岡本豊彥に就て畫を學び、後浮世風の畫を專らとして遂に一家を成す、天保年中の人なり。

宮澤武日　信濃善光寺の人にして畫家なり、初め岸駒に學びて圖畫を善くし、兼ねて俳諧を以て其の名高し年五十餘にして平安に遊び、岸駒の家に寄食し、常に師と將棋を鬪はす、一品やゝ低し、然れども旗鼓相當る、一日梅泉、岸駒を訪ふ、時に盛夏の候にして炎熱時に甚だし、武日綿袍を着、汗を流して玉の如し、梅泉之れを訝りて問ふ、武日答へて曰く、今日吾が將棋大敗して斯くの如きに至るなりと、是れ蓋し武日勝てば則ち岸駒の畫一幅を取り、敗せば則ち炎暑綿袍を着し、祁寒單衣を着するの約あるを以ての故なり。

三輪在榮　江戸の畫家なり、花信齋と號す、猿を畫くに妙なり、寛政九年四月二十二日歿す。

明業　水左配に曰く、明業等身の佛像を圖畫し奉ると。

明順法橋　佛畫師なり、年代等詳ならず、畫に巧なり。

明室曳　東海瓊花集に曰く、壬午の秋吾友古月明公外史、余に託して山水の圖を記するを索ひ、同門明室曳の筆する所なり云々と。

三柳林仙　狩野派の畫家にして武藏の國荏原郡大森村の人、通稱秀次郎、天保十年五月生る、花卉に巧なり

水口淺洲　通稱宗之介、文久三年十月生る、東京の人なり、山崎董詮の門人、小水花卉を善くす。

三宅克己　東京の畫家、水彩畫の名手と稱せらる、初め素山幸彥(後大野と改姓す)の開きし大幸館に學び、更に原田直二郎に就きて研究す、後英國に遊び『アルフ

レット』の門に入り刻苦勉勵、大に得る所あり、夫より米國に航し諸名家に畫法を質し遂に其蘊奥を極めて歸朝す。

宮下竹馨　通稱竹四郎、武藏の國北豊島金杉村に住す、信濃の人なり、天保十二年十一月生る。福田半香の畫を學び、花卉に巧なり。

三宅蘭崖　通稱高英、畫を大八木世香に學ぶ、山水に巧なり、又書を善くせり、武藏の國北豊島郡坂本村の人なり。

宮河石湖　南宋派の畫家にして東京の人なり。

宮本四明　一立菴と號す、加賀金澤の商賈なり、通稱吉兵衛、性畫を好み、且つ風流を愛す、家を次弟某に讓り、京師に出でゝ圓山應擧の門に入る、爾來研究毫も怠らず、其の技大に進む、然れども元來名を衒ふの徒にあらざるを以て、假令人に需めらるゝといへども、興到らざれば畫かず、故に其の遺跡のごとき、殆んど稀なり一日飄然として家を出でしが、其の後の消息得て知るべからず、然れども數年の後、九州にて邂逅せし人ありと云ふ、而して其の終る所を知らず。

水野年方　通稱久米二郎、別に蕉雪、聰齋等の號あり、慶應二年正月江戸に生る始め浮世繪を芳年に就て學び、後省亭に容齋派を學ぶ、また南宗派を山田柳塘、柴田芳洲等に學びしが再ひ浮世繪を專門とす。

三宅吳曉　京都の畫家、名は守廣、通稱清三郎、別號心遠齋、元治元年三月生る、榮川曾文に就て學び苦心以て一家を成す。

右田年英　東京の畫家、通稱豊彦、別に梧齋と號す豊後臼杵藩士、文久三年六月生る、芳年門下の俊秀たり

三島蕉窓　東京の畫家、嘉永五年六月江戸に生る、菊池容齋の門に學ぶ、人物、花鳥、山水を善くす。

◉し之部

集雲　名は守藤、集雲は其の字なり、江湖山人と號す、東福寺の僧なり、書畫を善くす、元和中寂せり

秀文　傳へ云ふ、明の歸化人なりと、畫を善くす、越前の朝倉家に寓し、曾我氏の贅婿となる、依て其の氏を冒して飛驒の國に住す、其の畫法、宋人の風を極め、別に一格を成したり、人物花鳥山水を善くす、最も風趣に富む、世に周文と判別せんがため、唐秀文と稱せり、是れ秀、周國曾相通ずるの故を以てなり、永和中の

人、或は曰ふ、秀文はもと其の人なし、故に其の名ありといへども、未だ其の遺跡の存ずを見ざるなりと、又曰く、秀文は禪僧なり、累世畫を以て業となすと、記して以て博雅の一考を煩はさん。

周位　畫僧なり、天龍寺に居りて侍者となり、畫を能くす、夢窓國師の畫像は、大概周位の其く所なりと云ふ、或ひは曰ふ、夢窓國師の侍者となり、道德の聞ゑ高しと。

至道　東洲と號す、東福寺の僧なり、聖一國師の法嗣にして畫を善くす、後元に入りて大覺寺を建立し以て其の開山となる。

七條信隆妻　平清盛の第六女なり、容色端麗、和歌連歌を善くし、又兼ねて圖畫に巧なり。

十洲　范古と號す、畫を善くせり、畫體朱風を修めて、之れを巧にせり。

子曇　宋の台州の人なり、文永年中我邦に渡來す、幾ばくもなくして歸り、正安元年、寧一山と舟を同じくして再び來る、北條貞時、師の禮を以て待ち、建長寺を董せしむ、德治元年十一月二十八日寂す、性畫を好み、之れを巧にす、京師紫野大德寺に、其の廬堂の像を畫けるものあり、筆力非凡なり。

篠田雲鳳女史　名は儀、伊豆の人にして詩家なり、經を朝川善菴に學び、畫を中井董齋に學ぶ、また大沼枕山小野湖山等名流の間に周旋し、文才煥發、世女儒を以て之れを推す、後王政復古に際し、開拓使女學校教授に擧げらる、後病に依りて職を辞し、愛宕山麓に住む、厚俸を以て之れを招くものありといへども、辞して應せず、明治十六年五月二十日歿す、年七十四、畫甚だ巧なりと云ふ。

芝慶舜　佛畫師なり、世に芝法眼と稱す、南都に住し、春日の畫所となる、世に佛畫多し、文明年中の人なり。

柴野栗山　名は邦彦、通稱彦輔、栗山は其の號なり、また古愚軒と號す、幕府の儒官にして讃岐高松の人なり英邁不群、群　耽思し、傍ら詩文を善くし、又畫に巧なり、近世の大儒なり、文化四年十二月朔日歿す、年七十四。

島女　吉村氏、島水と號す、河竹默阿彌の二女にして畫家なり、柴田是眞に就いて畫を學ぶ、其の高弟たり、明治二十二年十一月二十四日歿す、年二十八。

島　篆癖　名は駿、字は千里、江戸の書家なり、篆書に工に又傍ら篆刻を爲す、文化二年八月七日歿す、年六十二。

志水　雅樂　雅樂は書家なり。

清水　純齋　芳野金陵の外弟なり、幼にして穎悟、龜田綾瀬に就いて學ぶ、書法雄健快純、頗る其の氣象と相類す、木母寺及び白髮祠中に碑あり、是れ皆少時の筆に成れりと云ふ、又吏務に長す、文久年中、將軍家茂の京師に朝するや、副監察となる、當時道途の警備、朝參の儀仗は、大概其の定むるところなりと云ふ。

清水　雪信　狩野探幽の姪女なり、探幽に學びて其の法を得たり、世女畫家中の巨擘となす、其の子春信、また畫を學びて頗る巧なり。

志貴　瑞芳　眞宗大谷派正覺寺の住職にして、小岳また金西城北樓と號す、嘉永六年十一月生る、大阪の畫僧なり。

下田　歌子　幼名せき、後　皇后陛下より歌子の名を賜ふ、國學に通じ和歌の名手たり、美濃岩村藩督學平尾錄藏の女なり十五年召されて宮內省へ出仕す、長じて下田猛雄に嫁す、猛雄歿後再び出仕し權令婦となる、明治二十六年女子教育取調として英國に航し廿八年歸朝す、著書多し。

眞如親王　初めの名は、高岳親王と云ふ、淳和天皇の皇太子となりしが、讒を蒙むりて給ひて佛門に歸し、弘法大師と共に法を脩し、其の十弟子中に入る、書畫共に長じ給ひて、筆跡往々世上にあり、就中東寺醍醐寺に收むる所は、實に其の遺品なるものなり、元慶五年十月三日、唐に航し、尙ほ求法の爲めに天竺に至らんとし、途次流沙河の畔に於て遷化あらせらる。

淨賀法眼　信濃國白鳥康樂寺の住職、父は木曾義仲の功臣、太夫房覺明後信賀なり、信賀晩年、親鸞上人に從ひて眞宗の高僧となり、以て康樂寺を開創す、淨賀は丹青の技に長ずるを以て、本願寺三世覺如上人と相謀り親鸞上人繪傳四卷を畫く、是れ實に眞宗無二の重寶たり永仁三年五月二日寂す。

眞　濟　畫僧なり、紀氏、洛陽の人、弘法大師に從つて密敎を受く、後に高尾の峰に居る、承和の初年、勅を奉じて唐に入る、大同帝子僧眞如もまた弘法を師とす、弘法如道の後深く之れを慕ひ、之れが爲めに其の肖像を寫す、之れを高雄山上に建てしが、正曆久安の頃火

災にかゝりしも像龕燒けざりしと云ふ。

慈覺大師　壬生氏、名は圓仁、下野の人なり、延曆寺座主となる、善く不動尊を畫く。

清水伯民　名は邁、碩翁と稱す、長崎の畫家なり、書風一家を成せり。

眞海　行善坊と稱す、醍醐三寶院の住僧にして畫を能くす、連藏院寶染の弟子なり、後年宋に航し、留まること數年、美麗の毛幡十二天圖彩具以下多く將來し十二天屏風山水屏風等を畫く、皆三寶院の什物たり、後僧都に任ず、又名非海とも云ふ。

眞寂法親王　寛平法皇の皇子にして園城寺宮と稱す、俗名齋世、延喜元年十月二日剃髮して沙門に入る、眞言宗深秘の蘊奥を得、法驗の譽甚だ高く、而して餘暇を以て繪畫に志す、其の遺墨東寺に傳はれり、延長九年十月薨ず。

眞佛房　太夫法眼尊智の弟子にして太郎兵衛入道と稱す、八幡の繪師にして能畫なり、法華曼陀羅兩界曼陀羅八幡菩薩等を畫きしこと、石清水本社末社堂寺院の記に載す。

聖德太子　用明天皇の第一皇子なり、夙に佛法を尊信し、力を盡したる事蹟少からず、書畫に巧にして其の遺跡猶ほ現今に傳はるものあり、推古天皇二十九年二月二十二日薨ず、年四十九。

常曉　密宗の祖なり、大和國閼伽井の里に於ひて水を汲まんとす、水中忽ち大元明王の像を現ず、之れを視て畫き、以て本尊となす、今醍醐理性院にある所のもの即ち是れなり、小栗栖の常曉なるもの亦是れなり、此の像は、新に內裏を造營するとき、紫宸殿に掛け、以て法を修せりと云ふ。

珠光　事歷年代等詳ならず、畫を巧にす、常に畫くところは眞能を師とす、或人曰く、即ち是れ茶人珠光なりと、未だ其の眞否を詳悉せざるなり。

慈光寺謀　子興と號す、大藏大輔たり、畫を學びて花鳥を善くす。

成然房　上州前橋淨雲寺を創す、僧親鸞の弟子なり、寺說には、俗名は中將幸實、讒を被りて當國一の谷に配流せらる、其の自畫の肖像今に傳ふ。

性一　林氏、明國福州の人、其の先は宋の虞齋先生の裔より出づ、歸化して隱元禪師の法嗣となる、傍ら畫を善くす、寛文十一年五月二十五日寂す。

淨耀　信賀の孫、淨賀法眼の子、丹青の道其の父に繼いで之れを能くし、文和三年十月、其の畫くところの親鸞上人合掌の圖一幅、京都本願寺前常樂寺に藏す實に稀世の能畫たり。

堅覺　藤原通憲の孫、澄憲の子、安居院法印と號し、天台宗の碩德たり、法然上人大原問答の席に列し、其の說く所を聞いて大に之れに服し、遂に淨土宗に入れりと云ふ、又文筆に達し、餘暇畫事を弄せり、其の畫く所巧妙なり、嘉禎元年三月五日歿す。

紺桃　江戸の人、山本北山の配なり、名は如雲畫を善くし四君子を寫すに妙を得たり。

子建西堂　相國寺の僧にして丹青の技を善くせり、常に牧溪の風を慕ひ、自から自牧と稱し、文松室老人と號せり、書も亦甚だ巧にして書號を是菴と稱す。

勝法坊　法然上人の高弟なり、資性畫を好み、其の技に長ず、嘗て上人の像を寫す、之れを觀るに、左右の手に明鏡二面を持ち、又水を器に盛り、自から之れに臨み、形容の疑似を考ふ、少も違ふ所あれば、則ち胡粉を加ふ、是れを以て勝法坊に授く。

常明　清盛嘗て曼陀羅二圖を高野山金堂に掛く東にあるのもは則ち、自から之れを作り、西にあるものは常明をして之れを畫かしめたりと、平家物語に出でたり、左れば平相國同時の頃の畫僧たらんか。

叔淵澄西堂　大吉祥五字の神咒を寫し、以て尊像の圖を作る、之れを察るに、行蟻列をなして閃動し、相定まらざるが如し、熟視すれば則ち宛然たる筆描のみ、畫僧なり。

聖武天皇　泥金の宸畫某寺に藏せり、實に巧妙なるものなりと云。

重宗　水左記に曰く、承保四年八月六日條下に云。重宗正身土費像釋迦藥師觀音延命十一面の五體を繪圖し奉る云々とあり。

乘臺　法然上人一夕夢中に淨土を見、乘て善導大師を見る、覺めて後に、乘臺をして其の見る處を圖せしむ、其の後宋朝より善導大師の畫像渡來せしかば、之れを觀れば則ち夢中に見し所のものと、毫も異なる所なし、近世所謂夢中の善導大師と云ふもの則ち是れなり、之れに由つて見れば、乘臺は畫工なるべし。

十返舍一九　名は貞一、通稱與七、重田氏、戲作の大家なり、畫を好みて、稍其の技に通せり、天保二年八月

七日歿す。

白加　百濟の畫工にして歸化せり、用明天皇の時なり。

蛇玉　浪花の人にして畫家なり、葛城氏、名は季原、字は子明、蛇玉は其の號なり。

寂源　藤本敦直の子にして高良山の座主なり、大僧正となる、兼て書傳を本莊道芳より傳はり、特に能筆の聞ありしと云ふ。

鹽川文鵬　文鱗の男、多年清國に遊び苦心研鑽遂に南宋畫の奥儀を極む。

若芝喜左衛門　若芝初代の彫工なり、俗に『じやくし う』と云ふは誤りなり、肥前長崎の人なり、唐畫の山水遠景の人物、又は風竹蟠龍を彫るに、渴筆或ひは寫眞の趣に擬し、蕭索として古色なり、是れ其の初めは蘭人より畫法を傳はりしものなりと云ふ。

寂本　俗姓長谷川氏、雲石堂と號す、紀伊高野山の住僧にして山城深草の人なり、天資明敏、度量究大少時高野山に登り、應盛阿闍梨に從ひて落髮す、幾ばくもなくして應盛寂せしかば、快雲阿闍梨に就ひて法を脩す、盛畫の功空しからず、妙法玄理に通ず、又外典に精しく、詩を賦し文を屬し、畫を善くし、畫に巧なり、又彫工の技に長せり、元祿十四年十月十五日疾を得、正念にして終る、年七十一。

壽昌　雪村に學びて畫を善くせり、其の畫く所多くは蘆雁にして妙なり。

修理季長　畫人なり、嘗て鎌倉永福寺の扉及び門の板壁に畫けりと云ふ。

島崎柳塢　東京の畫家、通稱友輔、慶應元年生る、明治十二年櫻井久に就て洋畫を學び後竹本石亭、松本楓湖、川端玉章等に從て邦畫を研究し爾後和漢古今の畫法を參酌融渾して別に新機軸を出す、殊に美人畫に巧なり

白井惟德　名は惟德、一に赤水、字は元癡、發素園と號す、本姓は紀なり、平安の醫師にして畫を善くす、來り學ぶもの多し、天保九年十一月十七日歿す、年七十七。

慈光寺有仲　土佐派の畫家なり、一雲と號す、文政十一年正月生る、土佐光文に學び、人物に巧なり。

芝琳齋　名は新助、畫を岡島林齋に學ぶ、花鳥を善くせり、東京に住す。

繁岡翠坡　名は德三、文化十一年三月生る、南宋派

の畫家にして佐藤山齋の門人なり、山水を善くす。

松園女史　京都の人、姓は上村、畫界の女傑と稱せらる、初め鈴木松年の門に入り後竹内栖鳳に就て學ぶ、曾て「輕女別れを惜む圖」及び「花盛り」の圖を共進會へ出品して大に好評を博せり。

新庄東岳　名は直芳、天保十一年六月生る、南宋派の畫家にして山崎蕙詮の門人、東京に住す。

白石氷嵓　名は澄彦、文政八年四月生る、德川幕府の臣なり、文晁及び其の子文二に畫法を學ぶ。

篠原東灣　南宋派の畫家なり、嘉一郎と稱す、慶應三年九月生る、高橋月彎の弟子なり。

下村觀山　東京の畫家なり、初め狩野芳崖に學び、後西洋大家の筆意を研究し、遂に一家の風を爲せり。

島田疎石　名は政齋、天保五年九月生る、黑岩金岳及び安田老山の門に入つて畫を學び、山水を善くせり。

白井道澄　和齋と號す、文政三年生る、貫名海屋の門人にして山水を善くせり。

四宮松濤　名は昌則、弘化二年九月生る、松若熊峩の門人なり、山水を善くす。

晋永機　東京の俳人なり、文政八年生る、其の流を汲み其角堂と號す又老鼠堂、阿心庵等の號あり、著書多し。

重春塘　父を三二と云ふ、河北春谷に就いて畫を學び、京都畫學校に出仕す、密畫に工なり。

下條桂谷　名は正雄、羽前の人なり、弘化二年生る目賀田後素の門に入りて畫を學ぶ、人物を善くす。

柴田芳洲　名は弘、名古屋の人、初め喜田華堂に就て學ぶ、後南宋派に移る、明治二十某年歿す。

◉ひ之部

樋口逸齋　名は親之、字は子順、通稱昌之助、畫家なり、明治十年四月二十一日歿す、年六十三。

久國　掃部助と稱す、畫人なり、大永甲申の年眞如堂の繪詞三卷を畫く、初卷は後柏原天皇の宸翰にして、中卷は青蓮院尊鎮法親王、下卷は入道前內大臣曉空前大僧正公助の両筆なり、今尙ほ眞如堂に藏せりと云ふ

平田篤胤　和學者にして書を善くす、幼名正吉、通稱大角、大壑又は氣吹廼舍と稱す、安永五年八月、出羽久保田の城下に生る、篤胤年八歳にして中山菁莪に學び漢學を脩ひ、十一歳にして叔父柳元老に就きて醫術を學

び、二十歳の頃奮然として志を起し、遺書して國を去る僅に一両を懐中するのみ、其の江戸に達するや、知己朋友に寄らず、獨立以て身を立てんと欲し、或は人の使役するに任せ、或は糊口の爲めに苦使せられ、艱難流離、遂に大に名を成すを得たり、天保十四年閏十月十一日歿す、年六十八。

平野仲安　松葉軒と號す、書家なり、京師に住せり松花堂の門人なり。

平林東谷　名は明雅、字は德卿、書家なり、江戸の人惇篤の子、別に仁山の號あり。

平井雅齋　名は維章、字は子良、仙右衛門と稱す、江戸の書家なり、文化元年七月一日歿す。

廣瀨青邨　有名の詩家廣瀨淡窓の養子なり、名は範治、字は世叔、青邨と號す、北豐下毛郡土田村の人、本姓矢野氏、淡窓に就いて學ぶ、明治元年、徴されて京師に入り、漢學所に直す、八年岩手縣に奉職し、後各地の教授となりて子弟を薫陶す、明治十七年十二月三日、病んで歿す、年六十六、書法に巧にして、兼て蘭竹を畫く詩は最も長ずる所にして一家を成せり。

廣瀨淡窓　豐後日田の人にして近世の儒者なり、名は建、字は子基、求馬と稱す、人と爲り温恭篤實、言語苟もせず、家塾を開きて門生に教授す、安政乙卯の年七十四を以て歿す、淡窓詩を善くし、又畫に工なり、大村府内の二侯、禮を厚くして之れを延き、賓師を以て之れを遇し、以て諮詢する所ありと云ふ。

廣瀨旭莊　有名の詩人にして能書家なり、名は謙、字は吉甫、旭莊又梅墩と號す、豐後の人、大阪に住す、淡窓の弟なり、文久三年歿す、年五十七、著書若干あり

日野僧正　名は仁海、弘法大師八世の法脈、小野隨心院の住僧なり、畫を善くす、遺筆少なからず、就中三寶院の仁王曼陀羅は、有名なる畫幅にして筆力非凡なり

日比野白圭　土佐派の畫家にして尾張の人なり、通稱金吾、森高雅に就いて畫を學ぶ、人物及び動物を善くす

平岡靜觀　爲十郎と稱す、狩野派の畫家なり、父澤右衛門に就いて畫を學ぶ、後鹿兒島藩の畫工となる、山水に巧なり。

平塚蕉窓　通稱彌太郎、文化二年六月生る、南宋派の畫家なり、野口幽谷の門に入つて學ぶ、花鳥に巧なり

人見淇堂　通稱甚四郎、書を椿々山に學ぶ、南宋派の畫家にして花卉を善くせり。

平山東岳　名は季雄、天保七年三月生る、長谷川玉峰の門人にして四條風の畫家なり。

平福穂菴　通稱順藏、圓山派の畫家なり、竹村文海に學ぶ。

姫島竹外　大坂の畫家、名は純、字は子純、通稱解三、別に玄洋釣徒と號す、天保十一年三月福岡に生る、黒田候の世臣なり、初め村田東圃に就て南宗派の畫を學ぶ、後研鑽多年業大に進む。

◉も之部

默菴　名は佚山、常足道人と號す、默菴は其の字なり、大坂の人にして僧なり、篆書篆刻及び畫を能くし、はじめ森脩來と稱す、京師に住せり。

本居宣長　有名なる和學者なり、又書を能くす、姓は平氏、池大納言頼盛の裔、本居縣判官武秀四世の孫、享保十五年六月七日を以て伊勢松坂に生る、家に三十六の鈴を掛け、之れを以て悶を遣る、故に號を鈴屋と云ふ、姓强記絶倫、人と爲るに及んで京師に行き、堀景山に儒を學び、旁ら武川法眼に從つて醫を學ぶ、後鄕に歸りて加茂眞淵の著はす所の冠辭考を讀みて大に發奮し、書を眞淵に寄せ、名簿を通ず、爾來爲書相往來して以て能く其の蘊奥を究む、古事記の難語の如き、古來之れを解するものなし、篤胤之れを遺憾とし、大に精力を盡して傳五十卷を著はす、其の考證の精確なること、千載の疑義を氷解し、大に天下に觀迎せられ、盛名一時に鳴る、享保元年九月二十九日歿す、年七十二。

本居大平　初め名は茂穂、十介と稱す、作勢松坂の人、宣長の門に入りて學びしが、後其の養子となり、三四右衛門と稱し、藤垣內翁と號す、和學者にして和歌及び文章に長じ、又書を善くす、天保四年九月十一日歿す、年七十八。

森川曾文　京都の畫家なり、弘化四年八月生る、夙に前川五嶺に就て學び、後長谷川玉峯の門に入り研鑽多年遂に其の畫法を極む。

守田寶丹　名は祐孝、字は維則、丹丘と號す、幼名藤之助、通稱治兵衛、退隱して寶丹と改む、別に長祿寶丹樓の號あり、天保十二年六月生る、彼の寶丹本舗の主人にして賣藥商の巨擘たり、夙に書を善くす世に寶丹流と稱せらる一種の書風なり、亦好んで古錢を愛玩す。

森春濤　名は魯直、名古屋藩士なり、學和漢を兼

ね、詩文書を善くす。

森　槐南　春濤の男、名は泰一、一名大來、字は公泰、通稱泰次郎、居を觀詩軒と云ふ、詩文を善くす。

森　琴石　大坂の畫家、天保十四年三月生る、名は熊字は吉夢、亦鐵橋道人の別號あり、始め鼎金城に就て學び金石と號す、後琴石に改む、金城歿後忍頂寺梅谷に就て研鑽し大に得る所ありと云ふ。

桃田柳榮　名は守光、通稱武左衛門、幽香齋と號す、狩野探幽の門人にして能畫の聞ゐあり、元祿十一年正月十三日歿す、年五十二。

守一　泉氏、通稱吉兵衛、壽香亭と號す、畫家なり、はじめ古等琳の門に入りて學びしが、後狩野探信の門に入り、守の一字を得て、守一と改む、父を義信と云ふ、又畫を好み、狩野家の門人にして畫家たり、守一はじめ本郷一丁目に居を搆へ、頗る義俠あり、人其の行に感じ、俠客を以て之れを目し、渾名して目吉と稱す、乃ち此の渾名を用ゐて畫名となす、人皆其の奇に驚く、能く狩野派の筆意を傳へ、墨畫の雲龍及び槍鉋を畫くに巧妙なり、又た武者繪を善くす、町繪師にしては實に惜しむべき名手と稱せらる、町繪職人の頭として日光久能

両山及び上野、芝をはじめ其の他社寺の修膳に當りては其の彩色御用を勤めしと云ふ、文化中に歿す、年五十餘

森　寛齋　畫家なり、幾父徹山に就いて畫法を學び四條風の畫に長せり、京都の人にして畫學校の教授たり又勤王家を以て世に稱せらる、天資慷慨、心神玲瓏、談たま〳〵皇室の事に及ぶれば、則ち襟を正しうして語り、感涙潸々たりしと云ふ、人其の至誠に服せり、明治二十七年六月二日歿す、年八十一。

本居豐穎　幼名稻楠、後中衛また平造と稱す、秋の舍の號あり、和歌山藩士、天保五年四月生る、國學歌道に精くして書を善くす、神官に在ては大教正たり、高學校學に教鞭を採ること多年、後東宮侍講となる。

諸星成章　東京の畫家、舞鶴藩士、成長の男、明治三年九月生る、字は玉蓮、通稱連一郎、學和漢を兼ね亦劍法に通ず、畫を川端玉章に學び後美術學校に入り彙大に進む。

望月玉泉　名は重岑、字は主一、通稱駿三、京都の畫家なり、天保五年六月生る、父玉川に就て學び家業を襲ぐ。

望月金鳳　東京の畫家なり、平野淨惠の二男、弘化

三年三月大坂に生る、後望月家を繼ぐ、幼名數馬、更に學と改む、別號を小蟹と云ふ、夙に森二峯に圓山派の畫を學び、後西山完政に就て四條派の畫法を受く、動物に巧なり、最も狸を畫くに妙を得たりと云ふ。

森　周峰　名は貴信、鍾秀齋と號す、狩野派の畫人なり、大坂の人、吉村園山の門に入りて學び、後月岡雪鼎に就いて學べり、人物山水花鳥に長す、文政六年に歿す、年八十六。

森田士德　名は政、通稱吹田屋六兵衛と云ふ、河内の人なり、大坂に移居して子錢を業とす、能書家なり、人と爲り洒落にして恰も書生の如し、又能く人の急を救ひて以て悅ぶ、趙陶齊一日急あり、請ふて之れが金を借る、士德乃ち其の數を倍して之れに應ず、然れども毫も德とするところなし、好みて名流と交り、又書畫を愛して其の鑑識に富む、年五十ならずして歿す。

森　陽信　有名の畫家狙仙の兄なり、二弟周峰と丶もに三人皆名あり、永春齋と號せり、文政五年歿す、年七十三。

狩野派の畫家にして永春齋森陽信なるものあり、文化五年歿すと扶桑畫人傳にあり、其の歿年に於いて違なるところありといへども、恐らくは同人ならんか、永春齋は前篇に掲げり。

師　足　一に諸垂に作る、畫を以て時に鳴る、樂府の屏風を畫けり、俱に大鏡を載す。

諸　元　寛德二年十二月九日、歌合せあり、諸元其の洲濱盤上に畫く。

望月勘助　大坂の人なり、祇園社に額あり、享保の頃の人なり。

森　克　字は子禮、青山とす、文化の頃にして紀伊熊野の人、畫家なり。

森　三樹　名は照治、茨城の人なり、南宗派の畫家なり。

森野香村　名は保、天保十二年七月生る、淵邊游萍の弟子にして南宋派の畫家なり、花鳥を能くす。

森内雪堂　通稱緣之助、萬延元年三月生る、吉澤雪葊の門人にして南宋派の畫家なり、山水を能くす。

最上純堂　羽前の人、南宋派の畫家、西塔大原の門人なり。

森　春岳　京都の人なり、畫を岸連山に學び、花卉動物に巧なり、京都畫學校の教授となる。

森脇雲溪　東京の書家、通稱駒次郎、川越藩士佐藤圭山の二男、安政五年二月奥州棚倉に生る、後森脇氏を継ぐ、南北合法にして花鳥の專門たり、就中香魚に巧なり。

守山湘颯　伊勢甚八の男、鐵翁に就いて畫を學び、其の技に通せり、山水花卉は其の最も善くする所なり。

守川周重　通稱音次郎、浮世畫師なり、豊原國周の門人にして人物を善くす。

桃田柳昌　名は守明、柳榮の男なり、畫を能す、寛永九年正月歿す、年三十九。

物部刀自賣　刀自賣は、葛原等麻呂の妻にして、和歌を善くせりと云ふ。

森田皆山　名は晋三、天保二年生る、御弘堂齋の門人にして畫を能くす、時に山水に巧なり、性遊歷を好み足跡天下に遍し、常に眞景に對して之れを寫す。

●せ之部

成賢　少納言信西の孫、櫻町中納言成範の子にして、眞言宗の高僧なり、文筆を善くし、著書頗る多し餘暇に繪畫を弄び、其の筆する所、超凡のものあり、著色稀にして白描のもの多し、法德を以て僧正に昇る、寛喜三年九月十二日遷化す、年七十。

正敬　微書記の門人にして和歌に長ぜり、又畫を善くし、師の風を得たり。

成寶　自聖房の弟子にして眞言宗の僧なり、頼賢と號す、東寺の七祖影を摸寫す、今御影堂に掛くる所是れなり、永和年中の人。

正般　歌人なり、又畫を微書記に學びて之れを善くす、明應中歿す。

正甫　土佐派の畫人なり、其の姓氏詳ならず、泉州堺に住す、土佐光起の門人にして畫を能くす、鵜を畫くに妙を得たり、元祿年中の人。

瀨川　下總國の小見川村の農人某の女なり、幼にして江戸に出で吉原の妓樓松葉屋に賣らる、遂に妓となる、容貌絶群、舉措閑雅、而して氣節あり、琴棋書畫笙簫挿花茶道等、一として之れを知了せざるものなし、特に畫畫に工なり、畫は廣澤島石文徹明の風を學び、畫は池大雅を師とす、纖手筆管を握れば、忽ち雲煙紙上に跳る、人以て珍重せり、又易盆に妙にして往々寄中す、豪商江戸屋宗助の爲めに購はる、居ること歲餘にして死す、年二十八。

關口金鷄　名は興貞、字は行休、金鷄は其の號なり通稱嘉兵衛、上野の人にして江戸に居る、書家なり、はじめ江戸に於いて大橋流の書を學ぶ、金鷄故あり、出でて篠田氏を冒す、筆札の技を以て徒に授く、後剃髮して沙彌行休と號す、其の業盛に行はる、世に流布する所の墨蹟多し、寶十三年十九日歿す、年七十九。

關口黃山　名は忠貞、字は世篤、通稱貞助、後嘉平と改む、黃山は其の號なり、金鷄の子にして太宰春臺の門に入り、學ぶこと朞年餘、學大に進む、又關鳳岡に從ひて臨池の技を學び、六書に精通す、父其の筆札を以て世に顯はれしめんと欲し、勸めて止まず、黃山亦之れに從ひ、是れより專ら書を學ぶ、遂に一大書家となる、延享二年四月十八日歿す、年二十八、時人之れを惜む。

關敬明　字は子哲、東山と號す、通稱信藏、本姓小堀氏、小室藩士なり、江戸の書家、天八明年八月二十一日歿す、年三十八。

關雪江　名は思敬、字は鐵卿、江戸の書家なり、鳳岡以來の書家にして相傳へて五世、土浦侯に仕ふ、人と爲り醇躍にして奇氣あり、常に淨瑠璃を好み、又聊か之れを謠ふ、每に混堂に至り、入俗中暗所に蹲踞し、得々として一二曲を謠ふ人其の雪江たるを知る、又出仕の歸途盛裝して魚肆に至り、鮮魚を購ひ、之れを藁苞に包み手に提げて去る、觀るもの塔然たり、然れども雪江更に顧ず、其の書に於けるや、筆勢柔媚にして頗る逸氣に乏し、是れ蓋し法のために羈るゝに由れりと云ふ、明治十年十一月二十四日歿す、五十一。

關南頼　名は世美、字は士濟、南頼は其の號なり浪花の書家、書體一家を成す。

關良雪　一に自然齋と號す、江戸の畫家なり、牧溪、雪舟に倣ひて水墨畫を能くし、最も人物に長ず。

世尊寺行季　權大納言一條實久の子にして、世尊寺行康の後を受け、諸官に歷任して刑部卿兼侍從に至る、正二位に叙せらる、書を善くするを以て世に名あり、嘗て弟子を試めて曰く、世人の多くは古墨を好む、實に故なきにあらず、然れども書は繪畫の其の古さを厭はざるに異なり、墨を製する五七年或いは十年を以て期となす、若し之れを過ぐれば、之れを磨して泡多し、故に其に筆頭自在ならざるなり、是實に慮からざるべからざる所なりと、以て其の用意の周密なるを知るに足る、天文五年歿す、年五十七、遺跡多からず。

雪閑　奥州の岩城平の人、書法を雪村に學べり。

雪鮮　雪館の姪にして其の家を繼ぎ、以て江戸に住す、畫家なり、櫻井氏、名は絢、字は孟素、雪鮮は其の號なり、字を以て世に知らる、昌平黌の吏員たり、嘗て櫻花を愛し其の品種一百を撰し、之れを描寫して卷を成す、又嘗て丁祭圖を作る、遂に傳へて台覽に供せりと云ふ、寛政中の人なり。

雪峯　前篇掲載の雪峰とは同名異人なり、江戸神田大工町に居る、初代等琳の門人にして、其の俗稱を雉子定と云ふ、能く師の筆意を傳へ、又師の俗稱を傳へて堤孫二郎と稱す、二代目孫二あり、雪丘と稱す、俗稱筆安と云ふ。

全一愚　名は周崇、全愚は其の號なり、畫僧にして相國寺に住せり、應永三十年寂す、字は大岳、また臥遊道人の別號あり。

贍西　雲居寺の住僧なり、書を善くし、又和歌に名あり。

泉鐵　善川齋と號す、泉守一の門人にして江戸の畫家なり。

泉晁　溪齋英泉の門人にして江戸の浮世繪師なり、俗稱吉藏、貞齋も號す、靈岸島に住し、多くは草双紙、錦繪等を畫きて世に行はる、天保の頃の人なり。

泉里　通稱彌吉、嶺齋と號す、英泉の門人にして江戸の浮世繪師なり、本所に住す。

千家清足　出雲の宿禰大社の人、畫を善くす、文化中の人なり。

善範　嘉保三年三月十三日、僧善範、十二時不動尊像を畫く、其の酷文は宗孝言、書は藤原顯仲の手に係れり、蓋し畫僧なるか。

◉す之部

杉山律義　通稱松助、寒翠と號す、長門の勤王家なり、書を善くし、文を工にし、又和歌に長せり、元治甲子六月五日の夜同藩吉田稔麿、北剛信磨等と、もに、幕府の兵に襲はれて死す。

菅尚卜　蘭林龍と號す、初め大岡春卜に學び、後一家をなす、大坂の畫家なり、文化三年歿す、年七十八

鈴木和道　常陸龍崎の人、富五郎と稱す、後江戸に出で畫家となり、書を以て業となす、文化八年五月七日歿す。

鈴木周水　井出正水の門人にして書家なり、其の書風、師に劣らずと云ふ、或人曰く、同門に鈴木秋水（前篇にあり）なるものあり、一字の相違あるも同人なりと或ひは然らん今此に記して疑をなす。

鈴木誠一　其一の次男にして書家なり、明治十五年六月二十九日歿す、年四十八。

鈴木正眞　初め名は正信、後正眞と改む、京師の書家なり、岡崎正惠に從つて御家流を學で、之れを善くせり。

墨江滄浪　名は照猷、字は君徽、滄浪は其の號、通稱萬之助、熊本藩の儒臣なり、詩を善くして南郭と交り親しみ、又畫を善くせり。

隅田一味　狩野派の畫家なり、狩野常信に學びて善くせり。

住吉法眼　畫家なり、未だ其の姓氏事歴を詳にせず佛像人物を畫くに工なり、又花草を善くす、其の畫くところ、大和當麻寺に中將姫の緣起二幅及び聖德太子の行狀六幅、傳へて法隆寺に在りと云ふ。

住吉廣長　廣長は名、號は桂菴、江戸の畫家なり、其の畫風和風を善くし、殊に人物に巧なるを以て頗る稱せらる。

住吉廣當　畫家なり、其の畫風土佐より出で、後一轉して大に和風を唱へ、大に聲譽を博せりと云ふ。

陶山南濤　名は冕、尚善と稱す、南濤は其の號、土佐の人なり、京都に出で、伊藤東涯の門に入る、學成りて宮津侯に仕へ後京都また浪花に隱栖す、華音に通じ、能く小說を解く、又書に工なり。

菅原白龍　名元道、別號を日橋居士、和樂齊と云ふ、天保四年羽前置賜郡に生る、晩年東京に住せり、夙に熊阪適山に就て南宋畫を學び遂に一家を成す、山水に巧にして梅、竹を善く畫く。

杉村治信　畫工なり、天和の頃繪本を畫けり。

杉浦高陽　名は耕成、字は鋤雲、安政二年、越後高田に生る、秋山某の子にして杉浦勝雅に養はる、增田桂堂に就いて畫を學ぶ、後東京に出で、諸名家と相往來す花卉山水に工なり。

杉浦玉舟女　通稱こう、文久二年十月生る、瀧和亭、渡邊小華に從ひて畫を學ぶ、山水花卉尤も妙なり。

鈴木旭巖　通稱猪之助、嘉永元年三月生る、清水硯圃の門人にして南宋派の畫家たり、山水を善くす。

鱸　采蘭女　さはと稱す、南宋派の畫家なり。

椙山晴翠　南宋派の畫家にして奥原晴湖の門人なり花卉を畫くに妙を得たり。

鈴木百年　圖畫の男、京都の人なり、京都畫學校の教官なり、大椿と號す、人物に工なり。

鈴木松年　京都の畫家、百年の男にして百僊と稱す家業を襲ぐ、筆力勁健にして奇拔なり明治の岸駒なりとの評あり、曾て洛西嵯峨天龍寺の天井に大龍を畫きて其名高し。

鈴木華邨　名は宗太郎、萬延元年二月生る、畫を中島享齋に學ぶ、最も人物に巧なり。

鈴木玉仙　通稱清三郎、文久二年正月生る、佐藤玄覽の門人なり、人物を畫くに工なり、圓山派の畫家たり

鈴木瑞彦　文昇と號す、父を宗祐と云ふ、荻川文鱗に學びて畫を善くし、景色を畫くに妙を得たり。

古今畫畫名家全傳　終

明治三十六年九月廿八日印刷
明治三十六年十月八日發行

正價金卅錢

著作者　川瀨鷗西

東京市日本橋區通四丁目七番地
發行者　西村寅次郎

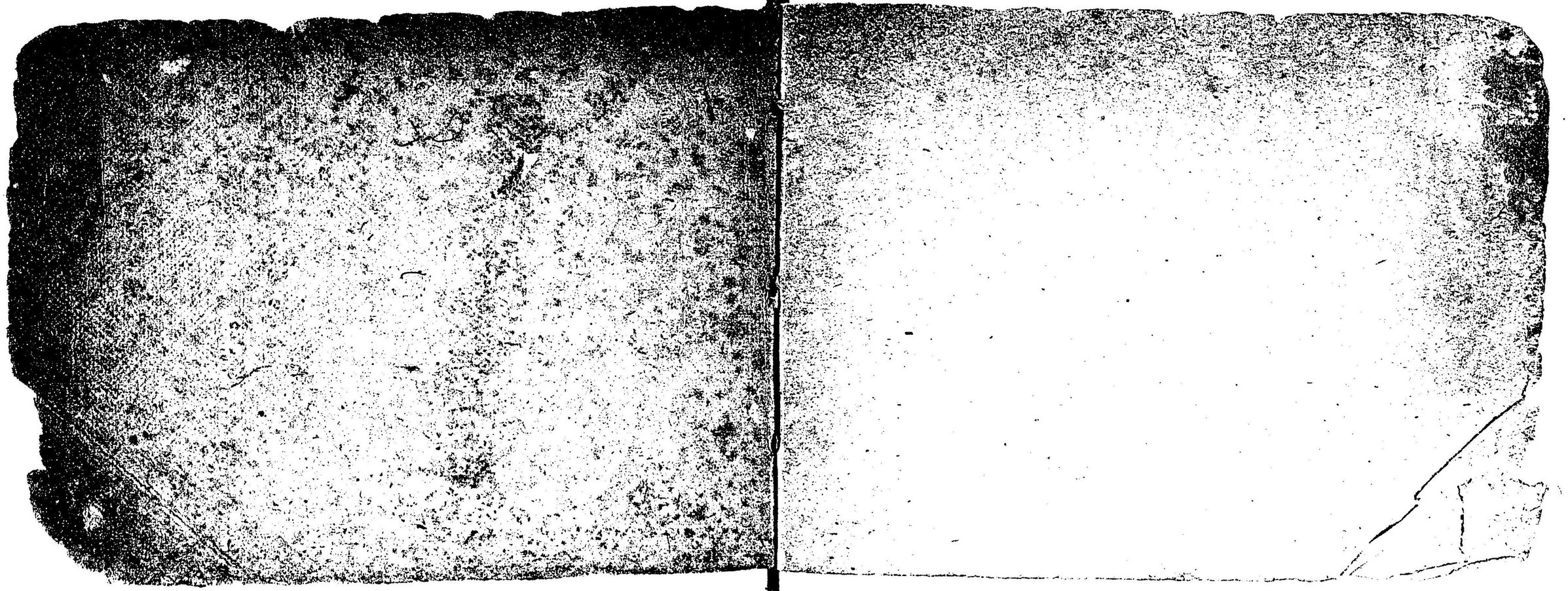
東京市神田區松下町十番地
印刷者　横田五十吉

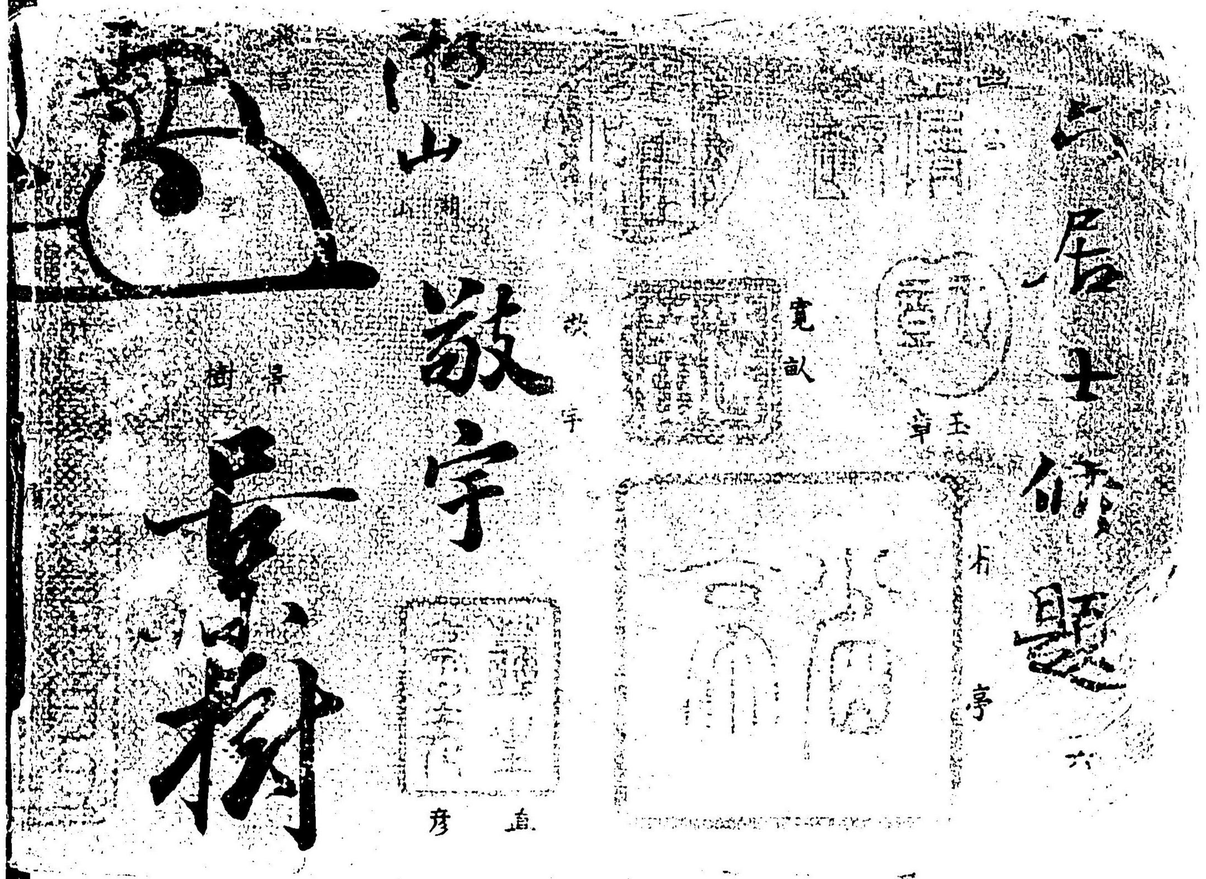
東京市神田區松下町十番地
印刷所　横田活版所

東京市日本橋區通四丁目七番地
發行所　東雲堂書店

著作權所有

260




六居士鑑題
玉章
亭
寬畝
敬宇
彥直
景樹

6
260

069833-000-8

6-260

古今書画名家全伝 続編

川瀬 鴎西／編

M36

CEC-0626